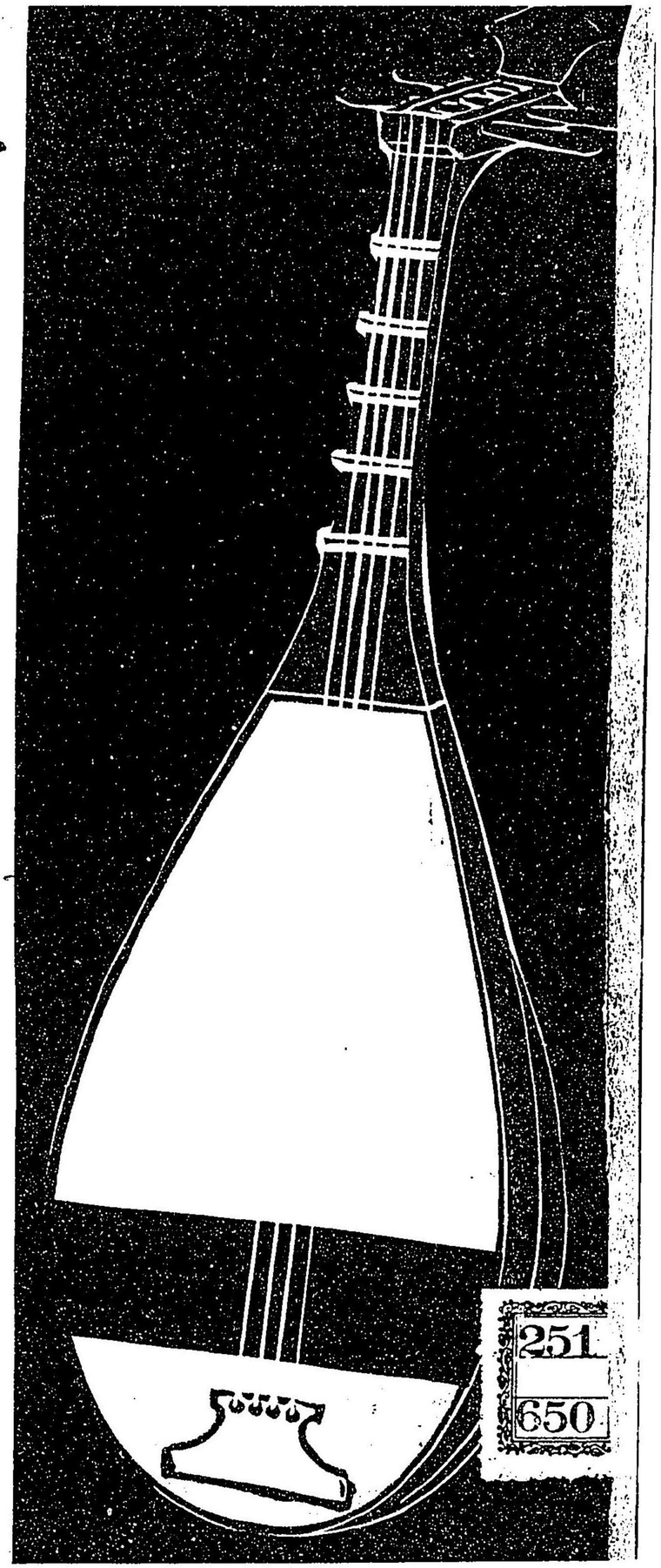


251
650

長谷部敬次郎

教育 體育 研究 第七十二号

東京高等師範學校內 大日本體育會

特23
413

光緒丙戌

世春

和氏

漢瓦

序

當時流傳する琵琶歌に平家、薩摩、筑前の三派あり筑前派に於ては橘智定師を推て巨擘とす予嘗て師の石堂丸を彈ずるを聽く其妙技人をして泣かしむ玉蘭達邑君好みて琵琶歌を作るを日清の役に海洋嶋の作あり橘師其曲を定め雙璧と稱す數日ならず都下に喧傳し遂に腋庭の聽に達す誠に兩君の榮なり玉蘭君後に數十篇を作り序を予に徵す茲に於て淺學寡聞を顧みず琵琶考略及異名集を編して之を贈り序に代へ併せて同好の一粲に供ふと云爾

明治丙午八月横濱ノ茅舍ニ誌ス　　錦坡　石橋絢彦

琵琶考略及異名集

琵琶ノ傳來ニ數說アリ〔釋名〕枇杷本出ニ於胡中一馬上ニ所レ彼也、推ニ手前ニ曰レ枇、引テ手却ク曰レ杷、象ニ其彼スル時ニ因テ以テ爲レ名ト也、〔風俗通〕近世漢ノ時ニ云フ樂家所レ作ル不レ知ニ其誰ナルヲ也、以テ手枇杷ス因テ以テ名ク長三尺五寸法ニ天一地一人與ニ五行一四絃象ニ五時一〔傳玄琵琶賦〕

琵琶ノ出所

伎樂ノ傳來

序曰、故老云、漢武帝元封六年ニ我開化天皇五十三年ニ當ル遣ニ烏孫公主ニ、江都王建ノ女、細君ト公主トナス烏孫ハ西域ノ一國ナリ嫁ニ昆彌ニ、始メ昆莫ニ隊シ後昆彌ニ隊ス師古曰昆莫、昆彌共ニ王號ナリ念ニ其行道ニ思ニ哀ニ使ニ知レ音者ニ裁ニ箏筑空侯之聲ニ作ニ馬上之樂ニ以ニ方語ニ、西域ニ〔事始〕或云、碎ニ葉國ニ不詳所レ獻トアリ漢、應劭ハ漢ニ制トシ他ハ胡、制トス其我邦ニ傳リタル年代ハ詳ナラサルモ〔日本紀〕雄略天皇十一年紀元一千一百二十七年百濟人貴信歸化又稱呉國人也、磐余呉琴ニ彈堀手屋形麻呂等是レ其後也トアル呉琴ハ琵琶ニアラズ垂古天皇廿年七二一年百濟人味摩之歸化曰、學ニ于呉ニ得ニ伎樂儛ニ則チ安置櫻井ニ而集ニ少年ニ令レ習ニ伎樂儛ニ於是ニ眞野首弟子、新漢齊文二人習ニ之傳ニ其儛ニ白鳳三年三四年勅ニ諸國ニ選ニ所部百姓之能歌男女及侏儒伎人ニ而貢上白鳳十四年四五年詔曰、凡諸歌男歌女笛吹者即傳ニ己子孫ニ令レ習ニ歌一百ニ朱鳥元年四七年正月倡優等ニ賜ニ祿有レ差亦歌人等ニ賜ニ袍袴ニ四月爲レ發ニ新羅客等ニ運ニ川原寺伎樂於筑紫ニトアリ此時佛法既ニ傳リ留學生ヲ隋ニ派遣セラレ數々朝儀ニ雅樂ヲ奏セラレタレバ雅樂寮モ置カレ琵琶モ或ハ傳來シタルナラン〔續日本紀〕大寶元年六一一三年雅樂、諸師如レ此之類、准ニ官、判任ニ養老三年七一九年令下ニ雅樂寮、諸師ヲ始ニ把笏ニ爲トアレハ此時已ニ雅樂寮ハ置カレタルナリ天平三年九一一年定ニ雅樂寮、雜樂生、員ニ大唐樂三十九人云々〔類聚三代格〕大同四年六一九年ノ大政官符ニ唐樂師

雅樂寮ノ起リ

琵琶ノ傳來

妙曲ノ傳授貞敏ノ傳

十二人、師、琵琶師、方琴師、笙師、篳篥師、歌師、餅師、云々トアリ由テ琵琶ハ大同年間ニ傳ハレリト謂フヘシ若シ其苻ノ註文ノ琵琶師ハ上文三十九人ノ中ニモアリト推論セハ天平以前ニ傳ハリタリト謂フモ可ナリ然レドモ其秘曲傳來ハ下ノ如シ〔琵琶血脉〕大唐、琵琶博士廉承武其技ヲ遣唐使掃部頭藤原貞敏ニ傳フ〔三代實錄〕貞敏者、刑部卿從三位繼彥之第六子也、少耽ニ愛音樂ニ好學ニ破琴ニ尤善彈ニ琵琶ニ承和二年爲ニ美作、椽兼遣唐使准判官ト大使ハ藤原常嗣副使ハ小野篁ナリ五年我一四九八年到ニ大唐ニ達ニ上都ニ逢ニ能彈ニ琵琶ニ者劉二郎ニ貞敏贈ニ砂金二百兩ニ劉二郎曰、禮貴ニ往來ニ諸欲ニ相傳ニ即授ニ兩三調ニ二三月間盡了ニ妙曲ニ劉二郎贈ニ譜數十卷ニ因問曰、君師何人、素學ニ妙曲ニ乎、貞敏答曰、是我累代之家風、更無ニ他師ニ劉二郎曰、於戲昔聞ニ謝鎮西ニ此何人哉、僕有ニ一少女ニ願令レ薦ニ枕席ニ貞敏答曰、一言斯重、千金還輕、既而成ニ婚禮ニ劉娘尤善ニ琴箏ニ貞敏習ニ得新聲數曲ニ明年聘禮既畢、解レ纜歸レ鄉、臨レ別劉二郎設ニ祖筵ニ贈ニ紫檀、紫籐、琵琶各一面ニ是歲大唐大中元年綱彥云開成四年ノ誤リ本朝承和六年我一四九九年也、七年爲ニ琴河介ニ八年遷ニ主殿助ニ少遷ニ雅樂助ニ九年春授ニ從五位下ニ數歲轉レ頭、齊衡三年兼ニ備前介ニ明春加ニ從五位上ニ天安二年丁ニ母憂ニ解レ官、服闋拜ニ掃部頭ニ貞觀六年兼ニ備中介ニ九年我一五二七年十月四日卒、于時年六十一、貞敏無ニ他藝ニ以ニ能彈ニ琵琶ニ歷ニ仕三代ニ仁明帝、文德、清和帝、雖レ無ニ殊寵ニ聲價稍高ニ焉トアルニ據レバ

貞敏ハ大同二年（我一四六七年）ニ生レ三十二歳ニテ琵曲ヲ修メタルナリ〔琵琶血脈〕貞敏其技ヲ清和天皇第四皇子式部卿貞保親王ニ傳フ〔古今著聞集六〕貞保親王桂河の山莊にて放逸し給けるに、平調にしらべて五常樂をなす間、灯火のうしろに天冠の影、髣髴現しけり、人〳〵おぢ恐れければ、所現の影みづからいはく、我は唐家の廉承武の靈也、五常樂急百反に及ぶ所には必ず來侍也とてうせにけり（古今著聞集ハ橘成季カ建長六年ニ著シタル書ナリ是ヨリ約ソ百年ノ後ニ一條兼良ノ著シタル東齊隨筆ニ此談ニ類スル記アリ貞保親王ヲ村上天皇トナス其他小異アリ〔古事談〕モ亦此ノ如シ）トアルヲ見レバ〔琵琶血脈及古今著聞集〕ハ琵琶ノ祖ヲ廉承武トナス〔三代實錄〕ハ劉二郎トナス〔日本紀略〕ハ劉ヲ劉ニ爲ル蓋シ二人二名ニアラズ廉ノ音ハ劉ニ近キヲ以テ誤リ二郎ハ小字ナルヲ以テ誤リタルナラン然ラハ廉承武ヲ正トスベキ歟

廉承武ト劉二郎ノ辯

貞敏ノ傳統者

貞保親王ノ統ヲ承ク者ヲ樂所預圖書頭源修（カミナモトノ）トス修ノ門人ニ兵部卿克明親王（醍醐天皇第一皇子）一男皇后宮（琵琶血脈ハ皇太后宮トス今公卿補任ニ依ル）權大夫源博雅及醍醐天皇第十七皇子西宮左大臣源高明アリ共ニ妙手タリ〔扶桑略記ニ〕村上天皇ノ康保二年（我一六二五年）十月七日殿上ニ侍臣ノ舞ヲ催サレ高明琵琶ヲ彈キ博雅横笛ヲ吹キ綺紳或ハ樂ヲ奏シ或ハ舞フ侍臣ノ殿上舞ハ是ヲ以テ濫觴トス博雅ヨリ數傳シテ妙音院太政大臣藤原師長及師長ノ弟子尾張守藤原孝定ノ二派ニ分ル師長ノ太政大臣トナリタルハ高倉天皇ノ治承元年（我一八三七年）治承三年十一月十七日有事解官宣旨。流涙。即被追出宮城。十二月十一日於尾張國出家此時四十二歳也。上文依公卿補任ナリ其傳統ヲ繼ク者ニ前內大臣藤原實宗（建永元年（一八六六年）辭任出家年六十二）左大臣藤原公繼（安貞元年（一八八七年）辭任建永元年（一八六六年）出家法名寂惠年五十九）前權大納言藤原隆家（元久二年（一八〇五年）辭任承元五年（一八一一年）出家安貞元年（一八八七年）辭任貞應二年（一二二三年）歿去年六十五世稱二條大納言）歌人琵琶ニ詩歌ニ秀ル前太政大臣藤原通光（寛治二年（一〇八八年）辭任歿去年五十三）權大納言藤原定輔（承元五年（一二一一年）辭任貞應二年（一二二三年）出家安貞元年（一二二七年）歿去年六十五）攝政關白藤原忠家（文永十一年（一二七四年）歿去年四十六）權大納言藤原公持（文永五年（一二六八年）歿去年四十二）權大納言藤原通行（文永七年（一二七〇年）歿去年六十九）等アリ孝定ノ系統ニ權大納言藤原公持ノ弟子ニ權律師圓快アリ圓快ヨリ行澄ヲ經テ伊賀守散位源憲延ニ至テ終ル是琵琶血脈ニ記ス所ノ大要トス嘉禎二年（我一二一八年）ノ〔大饗次第〕及文安元年（我一四四二年）ノ〔田樂能記〕ニ記スル琵琶ノ彈奏者〔增鏡むら時雨卷〕元德二年（我一二八〇年）主上（後醍醐天皇）北山ニ行幸ノ時ニ琵琶ヲ皷キタル前右大臣兼季ノ如キハ貞敏ノ末流者ナリ按スルニ琵琶ハ白鳳（神武紀元三三一年）一ノ頃伎樂ト共ニ傳來シ貞敏ニ至テ（千五百年ノ頃）妙曲ヲ傳ヘ村上天皇ノ時代（千六百年頃）ヨリ漸ク盛ニ土御門天皇ノ頃（千八百年）ニ大臣參議ノ能手多ク元弘（元年ハ一九九一年ニ當ル）ノ頃ニ至リ兵亂ノ爲ニ其技衰ヘタリト思ハル然レトモ雅樂寮ニハ貞敏ノ衣鉢ヲ襲クモノアルナリ是ヲ假リニ雅樂派ト名ク此派ノ琵琶ハ雅樂ニ隨伴シ箏笛等ト合奏スル事多

師長及孝定ノ門人

雅樂派

キヲ以テナリ

〔東齋隨筆〕ニ逢阪の蟬丸は。式部卿敦實親王（宇多天皇御子）の雜色なり。盲目と成て琵琶を引けるが。逢阪の邊に庵を結て住（ホ）り。博雅の三位（延喜御孫。克明親王子。源氏也）是に流泉啄木の調をつたへたり。敦實親王管絃の道に達し給へり。蟬丸がびはは是を聞取て彈ける也。其よりして盲目の琵琶引ことは始れり。トアリ〔江談抄〕ニ類似ノ記事アリ博雅ハ琵琶ノ妙手會阪目暗（蟬丸ノ名ハ見ズ）ヨリ流泉啄木ノ調ヲ授カリタリトアリテ〔東齋隨筆〕トハ全然相反セリ其全文下ノ如シ「博雅三位、會坂目暗ニ琵琶ヲ習フ事ヲ被レ知乎如何、答曰、不レ知、談曰、尤有レ興事也、博雅、高名管絃ノ人ニテ、イミシク道ヲ重ク求ニ、會坂目暗琵琶最上之由風聞、世上人々雖レ令ニ請習一、更以不レ得、又住所遠以ところせくて、行向人少々也、博雅先以二下一人一、內々にいはするやう。などかくて不二思一懸所ニハ住スルゾ、京都ニ居テ過よかしとすかすに、目暗詠レ歌曰

世中は逆もかくてもすぐし天宮も藁屋も果しなければ

ト詠テ不レ答、使者以二此由一云爾、博雅思樣此目暗、命有二旦暮一我モ壽不レ知ヲヤモ、尙流泉啄木ト云曲ハ此目暗ノミコソ傳ケレ、相搆テ聞レ彈欲レ傳之處、三ケ年間夜々向二會坂目暗許一、竊立二聞宅一、頭更以不レ彈、三年ト云八月十五夜、ナロヽクモリタルニ、風少シ吹、博雅思樣アハレ今夜ハ有レ興カナ、會坂ニ如レ案、琵琶ヲ鳴ラシムル程、盤涉調ニ鳴、博雅聞テ尤有レ興、啄木ハ是盤涉調也、今夜此絃鳴、定テ欲レ彈カト思テウレシク思間、目暗獨遣レ心テ人モナキニ詠レ哥曰

逢坂の關の嵐の烈敷にしひてぞねたる世をすぐす迚

ト詠テ鳴絃ニ、博雅頻啼泣ス、好迚アハレナリトオモフニ、目暗獨又云、アハレ有レ興夜カナ若我ナラズスキ者夜世間ニアラナム、今夜コヽロ得タラン人ノ來遊セヨカシ物語セント云ヲ聞テ、博雅出レ音云、博雅コソ參タレト云ケレバ、目暗云、タレニカナハスルト問ニ、然也ト答、目暗ヲトニ聞ケレバ、感シテ物語シテ、遣レ心令レ傳ニ件曲一云々、博雅依レ不レ隨一身琵琶一、只譜傳請歸云々、諸道之好者、只可レ如レ此也、近代作法誠ニ以不レ可レ有、サレバコソ上手ハ諸道ニアレ近代仁無事也、誠ニ以アハレナリト被レ談ニ、又問云、件曲近代アリヤ、被レ答曰、第一世無雙者、代國亂旋ゾ、第一ノ曲ニ用也、傳者少、件人所傳也」、

トアリ二書ノ同キハ逢坂ニ盲ノ琵琶ノ妙手アリシ「ナリ今其時代ヲ考フルニ博雅ハ三品兵部卿克明親王一男ニテ官ハ從三位皇（琵琶血脈ニ皇字ノ）

下ニ太字アルモ公卿補任ニ依テ削ル　后宮權太夫トナル延喜十八年（我一七八年）ニ生レ天元三年（我一四〇年）九月十八日六十三歳ニテ薨セラレタリ然レバ逢坂盲人ハ村上天皇（即位一六〇七年）前後ノ人ナリ〔圓珠庵雜記〕ニ

琵琶法師ノ名稱

玉葉雜五　「よつのをのしらべにつけて思ひいでよ半の月に我も忘れじ

兼盛集　びはのほうし「よつのをに思ふ心をしらべつつ引ありけどもしる人もなし

ヲ引テ琵琶ノ異名ヲ四絃ト云フモ琵琶法師ト云フコトモ此歌ニ始テ見エタリト云ヘリ〔三十六人歌仙傳〕ニ兼盛ハ兵部太輔篤行王（光孝天皇御子）三男天慶九年（我一六〇六年）叙ニ從五位下ニ賜ヒ平姓ヲ爲レ臣ト正暦元年（我一六五〇年）卒トアレバ琵琶法師ノ名稱ハ逢坂盲人ノ後二三十年ニシテ興リ法師ハ琵琶ヲ彈キ市中ヲ歩行キタルヲ知ルベシ其彈ク所思フ心ヲ調ベツツトハ物語ノ如ク卑俗ニシテ人耳ニ入ラザルニ似タリ〔新猿樂記〕ニ予廿餘年云々山背大御之指扇、琵琶法師之物語云々都猿樂之態、鳴囀之詞莫不ニ斷レ腸解レ頤者也トアリ此書ノ著者藤原明衡ハ本朝文粹等ノ作者ニテ治暦二年（我一六二六年）十月卒シタル人ナレバ物語（平家ニアラズ）ヲ助クルニ琵琶ヲ彈クヿハ後冷泉天皇（一七〇六年即位）ノ時代ニ掀マリタルナリ〔傀儡子記〕ニ動ニ韓娥之塵ニ餘音繞ニ梁ニ周者ニ潛傚不レ能ニ自休ニ今樣、古川樣、足柄、片下、催馬樂、里鳥子、田哥、神哥、掉哥、辻哥、滿周（一本作回）風俗、幽師（新猿樂記ニ此ノ別法士之類、不レ可レ勝レ

物語ノ始メ

別法士ノ名稱

計御是天下之一物也、師者者哉トアリ此書ノ作者大江匡房ハ天永二年（我一七七四年）七十一歳ニテ薨セラレ（大江系圖）ニ依ル新猿樂記ノ著者藤原明衡ニ後レル約四十年ニ當リ琵琶法師並ニ物語ノ熟語モアル時代ナレバ本文別法士トハ琵琶法師ト殊別ナル法師ヲ指スヿカ或ハ直ニ琵琶法師ヲ別法士ト訛傳シタルナランカ尚ホ後考ヲ俟ツ（序ニ記ス金子晋著日本事物起原）

今樣老人ノ說ヲ引テ今樣ハ治承四年ヨリ七十年前ニ始マルトナスハ粗笨ナリ已ニ傀儡子記ニ今樣ノ語アル以上ハ治承四年ニ當ル天永ノ頃ニアリシ事明カナリト謂フベシ又傀儡子記ノ滿周ハ一本ニ記スル如ク滿固ニテ下ニ出スルいちこ歌ノ訛傳ナラン卜思ハルナリ〔梁塵秘抄〕傳云ク此書ハ太政大臣藤原師長ノ著ス所ナリト書中ノ文ヲ按スルニ師長六十歳許迄久八年（一八五七年）頃ニ往事ヲ回想シテ記シタルモノナリ　ニ神樂、催馬樂、風俗、今樣の事の起より初て娑羅林、只の今樣、片下、早哥、うたふべきやう、初頃、大曲、足柄、長哥、を始として、やう〳〵の辭、かはるやうの歌、田歌に至る迄しおはりぬ云々さいのあこまろ（人名）とてあをはか（菅墓地名）の者をとどめおきて、足柄、たみ、伊地古、舊川、舊古柳、少々習ひし程に云々保元二年おとまへ（乙前人名）をよびよせて、つぼねしてをきて、足柄より始めて大曲樣、舊古柳、今樣、物語、田歌等に至るまで未だしらぬをば習ひ、云云、二年が間に今樣、娑羅林、片下哥、早哥、足柄、黑鳥子、舊古柳、櫨現、御幣等物樣、田哥に至る迄皆習ひて寫瓶し終りぬトアリ上文田歌ノ上ニ「かはるやう（恐クハかたるやうカ）の歌、物語、物樣ノ三詞アルモ、其實、物語同物異稱ニアヲサル

かはりやうの哥、物語、物樣ノ辭

平家物語ノ濫觴

歟ト疑ハル、其故ハ師長ハ十歳計リノ時ヨリ今樣ヲ好マレ、上下ノ別ナク京ノ男女ハ謂フニ及バズ、地方ヨリハ神崎、江口、青墓、すの眼ノ遊女、諸國ノクグツ（傀儡子ノ訛）ヲ召シテ、苟モ今樣ト稱スル者ハ之ヲ聞カズト云フコトナク、功ヲ積ム四十餘年、其上ニ琵琶モ箏モ巧ミニテ人ニモ教ヘ傳統ノ弟子モ有ルコトナレバ、當時ニ於ル琵琶ノ諸藝ヲ窺ハザルハナカルベシ、此時已ニ琵琶ニ物語（平家ニハアラズト稱スルモノアルニ依テ斯ニ物語物樣ナド書シタルニアラサルカ是亦後考ヲ俟ツ〔醍醐雜抄〕）ニ或平家双紙奥書云、當時命世之盲法師了義坊（實名如一之說）ニ云、平家物語ハ中山中納言顯時子息左衛門佐盛隆。其子民部權少輔時長作レ之。又將門保元平治上上四部同人作云々、此時長前ニ作ニ平家廿四卷之本ヲ、籠ニ伊勢大神宮ニ（ニナリヌレ）訖、是佐渡院（順德帝）之御時也、後嵯峨院御在位之時、吉大貳入道輔常作レ之、平家物語ハ民部少輔時長書レ之、合戰之事ハ依レ無ニ才學ニ、源光行（絢彦曰光行者海道記ノ作者千載集撰者。貞應二年歳可五十）詠レ之ヲ、十二卷平家ハ資經卿書レ之〔史籍集覽解題〕ト部兼好云、後鳥羽帝時、信濃前司行長作ニ平家物語十二卷ヲ、授ニ之ヲ瞽者性佛ニ、而使レ詠ニ唱之ヲ、日ニ件ノ錄ニ載ス瞽者最一、語ニ曰、昔菅原爲長卿作ニ平家十二卷ヲ、後日ニ性佛ト者。上セニ之音曲ニ而詠歌耳。又載ニ瞽者蘆一、語ニ曰、如ニ平氏合戰ニ者、惡七兵衛景清記レ之、如ニ和歌文官等ニ者、平大納言時忠記レ之、而後菅原爲長据撫（キヨサイシテ）以集レ之、玄惠法印裁テ爲ニ

琵琶法師ノ態

一書ニ、名曰ニ平家ニ。相共評論者三十四人、但時忠景清不レ與焉、葉室系圖ニ云、葉室時長、平家作者之第一也、羅山林子（ハヤシ）以爲（ナセリト）、時長所レ撰者盛衰記、行長所撰者平語也、亦不レ知ニ何所ノ據也、トアレバ平家琵琶ノ起リタル年代判然セサルモ光行ノ時代ヨリ推セバ順德帝ノ頃ナランカ斯ニ後鳥羽帝ノ時ト云フハ稍早キニ失スル嫌ヒナカラズヤ〔七十一番歌合〕ニ剃髮シタル盲目老人、僧衣ヲ着シ肩ニ袈裟ヲ掛ケ胡坐シテ膝上ニ琵琶ヲ上セ左手ニ竿ヲ握リ指ニテ絃ヲ抑ヘ右手ニ撥ヲ持テ少シ上ヲ向キ口ヲ開キ今ヤ謠ヒ居ルノ態ナリ坐前ニ簫（調子笛ニ似タル圖ナリ）横笛（鐵葉ナルヤモ知レズ）アリ傍ニ二枚齒ニテ前後ヲ圍クシタル木履（ゲタ）ノ鼻緒ニ杖ヲ貫キタルヲ置ク圖アリ上ニ琵琶法師ト題シ傍ニ三行ニ「あまのたくもの、ゆふけふりおのへの、しかの曉のこゑ」トアリ是ハ謠ノ詞ナランカ次ニ女盲ト題シ五行ニ「宇多天皇に、十一代の後鳳、いとうがちやくしに、かはづの三郎とて」トアリ是モ謠ノ詞ナラン其下ニ下髮（サガミ）ノ女坐リテ左手ニ鼓ヲ持チ右手ヲ擧ケテ之ヲ拍ントスル態ヲ描キ傍ニ長方形ノ草履ニ杖ヲ貫キタルヲ置キタリ其圖前ニ歌ト判者ノ評アリ〔群書類從略解題〕ニ原本ハ土佐光信畫、坊城和長ノ詞書ナリト云フ〔扶桑名畫傳〕ニ光信ハ永正（元年ハ二一六四年ニ當ル）頃ノ人ニシテ壽九十餘歳トアリ是ヲ以テ琵琶法師ノ

徳川氏ノ初メニ於ル平家琵琶

大體ヲ知ルニ足ル〔醒睡笑〕ニ一向不文なる者、平家をきかんと行、なにとしてあの風情の耳に入事あらんやと、まことしからざりしが、かれ聞て歸りぬるまゝ、何と平家をきかれたか、されば木平家琵琶ヲ指シテ云フは一段おもしろかりつるに時々坐頭の諸フおめくでくたびれた○土肥の次郎實平は大手の木戸口に主從五騎にてひかへたると敎へければ、弟子思ふ、ひかへ物こそあらめ五き基匡ト思ヘルナリはいな(異)ものなり、せめてわん椀ノコはまさりなんと、晴がましき所にて、主從わんにてひかへたりと語れり○ノ類ヲ記ス其書ノ奥書ニ曰ク板倉重宗が幼時安樂庵策傳ヨリ聞タル事ヲ記シタルモノニテ策傳ハ原京師誓願寺ノ塔中竹林院ノ僧ニテ足利氏ノ末ヨリ德川氏ノ初ヲ經テ寛永十九年我二三〇二年正月四日八十九歳ニテ沒ストアリ然レバ此頃ニ至リ平家物語ト琵琶ト貧緣シテ平家ナル語ハ琵琶法師ノ異名トナル迄ニ流行シタリト謂フベキカ〔大内問答〕永正六年(一一六九年)伊勢貞久ノ著シタル書ニ坐頭、田樂、桂まひ云々トアリ

坐頭ノ解

又〔貞文雜記〕ニ琵琶ト云ハ盲法師ナリ平家物語ヲ謠ヒテ琵琶ヲ彈クナリ今モ琵琶法師有リ古ハ琵琶法師ノ事ヲ坐頭ト謂シナリ遊藝者ノ内ニテ琵琶法師上坐ニ坐スル故坐頭ト云フ事ニテ坐頭ト云フナリ撿校勾當ナドト云フ官ニナル故上坐ヲスルナリ」トアリ此三書ニ據レバ坐頭ノ語モ亦古キナリ然レド今ノ俗、盲人ノ琴ナドヲ鼓スル者ヲモ坐頭ト云フ、予聞ク筑前琵琶一轉シテ平家琵琶ノ一派興リ後又別ニ薩摩琵琶ノ一派興レリト云フ、他日三派ノ別ヲ記スル事アルベシト雖モ唯今琵琶流傳ノ大略ヲ述ルニ過ギス

琵琶異名集

琵琶異名

琵琶ノ異名數多アリ〔事物異名錄〕ニ蕣婆席上腐談ト曰ヒ馬上樂舊唐書ト曰ヒ秦漢子唐書樂志ト曰ヒ圓腹武夷山記ト曰ヒ遠殿雷珍珠船ト曰ヒ韓朋木楊維楨湖竹枝詞ト曰フ又胡琴ノ異名ハ〔席上腐談ヲ引テ〕王昭君琵琶壞使ニ胡人重造ニ而其形小ナリ、昭君笑曰ク渾不是シ、今訛テ爲ニ胡撥四ハ一作ル湖撥四亦作ル虎拍思ハ按ニ一說琵琶一名胡琴、今觀ニ胡琴、形似テ琵琶ニ而小ナリ殆ト卽チ所レ謂胡撥四歟、ト見ヘタリ又火不思或ハ琥珀詞共ニ正字通ヲ引ク ト曰ヒ胡琴、頭ヲ四牛懷麓堂集ト曰ヒ月琴ヲ阮咸國史纂要ト曰フトアリ然ルニ〔胡琴敎錄〕ニ如上ノ別ナク胡琴ヲ以テ琵琶ノ一名トナス〔圓珠庵雜記〕證歌上ニ山タリニ據レバ邦語ニテ琵琶ノ異名ヲよつのをト云フ

凡例

一此の書所載題目の順序は唯作歌の順序に據れり、すなはち逐次に歌の出て來しまゝに掲載したり

一題目の下に年月と地名とを記したるは作歌の年月と場所とを示したるものなり

一此書は自ら旅情を慰めんが爲め汽車汽船中若しくは客舍等に於て唯心の之くまゝに記述したるものなれば文體は雅俗混交にして或は過去體を用ひ或は現在體を用ひる等素より一定の規なし但し苟も各曲中の事蹟に關しては決して其正鵠を失せざるを期せり

一此書皇上に關するものも平頭闕字の例に由らず敢て敬意を致さゞ

るにあらず、一行の字數に稍一定の限りあるに依り止むを得ざればなり

一原本の曲譜は橘智定氏の附けられたるものなれ共此の書の曲譜に若し誤あらば其責は橘氏にあらず、全く予が校正上の過失に屬す

明治三十九年八月

涙速此花の里に於て

玉蘭　達邑容吉識

曲譜及曲節

合の手……
謠又は流し……
憂愁謠……
悲哀の譜……
戰又は爭の譜……
十二段……
吟替……
地語……
何頭又は何切……
樂き……
一、二、三、四、五、六、七及甲乙音調……

△……歌　又は歌の類
□……詩　又は詩の類
春……春節
夏……夏節
秋……秋節
冬……冬節
山……山越し
ア……旭節
ク……雲節
ツ……露節
月……月節
大……大落し

曲節及曲譜の説明

一、各句頭に附記する（一句とは本書半行の假稱なり）七より一に至り一より七に至る數字は語るべき音調卽ち音聲の仰揚を示すものなり七は最高甲調にして一は最低乙調なり要するに喜怒哀樂を表白すべく語るべし

一、或る句に在りては一句中二三の甲乙高低を示すものあり假令は「七並居る六勇將五猛卒も」又は「六さすが七聞ゆる六勇將五も」の類是なり

一、凡そ謠は三句を以て上中下一と節とするを通則とし而して之を「流し」と稱す然れ共句切の都合に由り二句或は四句を一と節とする場合あり二句の時は之を上下若しくは上中に謠ふ假令は

上〜六赤地に七白の抱柏　下〜染めたる旗は中川勢〻
上〜七白地に六黑の鎧蝶　中〜池田父子の馬印も

の如く又四句の時は

上〜程なくこゝに神南備や　三磐手の森の峯つゞき

中〰神内の宿に陣取りて
下〰明日の準備に忙はし

又は

上〰影はいづこに遠近の
中〰たつきも知らぬ原中に
三士卒にはぐれ道灌は
下〰一人彷徨ひ居たりけり

の如し尚或る稀有の場合に於ては五句を一ゞ節ゞ爲し或は單に一句を一ゞ節ゞなせるあり假令は

上〰朝日に匂ふ秋津洲
三扶桑國てふ名にめでゝ
中〰千代田に萠る民草や
三みどりを敷ける鴉の海
下〰比叡の山影うつるらむ

の如く又

〰露もしたゝる玉の面

の如し

一、曲節の種類を大別すれば凡そ十種あり即ち春夏秋冬の四節、山越し、旭、月、露、雲の五節丼に大落しなり又春節には大廻し、小廻しの差別ありて

曲節九譜号

上げ（あげ）	平伸べ（ひらのべ）
尾上げ（をあげ）	淘伸上げ（やりのべあげ）
下げ（さげ）	淘伸下げ（やりのべさげ）
尾下げ（をさげ）	小廻し伸べ（こまわしのべ）
平（ひら）	大廻し伸べ（おおまわしのべ）
伸べ上げ	引棄て（ひきすて）
伸べ下げ（のべさげ）	淘上引棄て（やりあげひきすて）

淘下げ（やりさ）
淘上げ下げ（やりあさ）
小廻し淘伸べ（こまわしやりの）
大廻し淘伸べ（おおまわしやりの）
淘廻し（やりまわし）
廻し下げ（まわしさ）
呑み（のみ）
抄ひ（すくひ）

休め（やすめ）
續き（つづき）
縮め（ちぢめ）
緩め（ゆるめ）

夏、春節の例

（芳流閣）

七

時しも頃は水無月二十日、

夏 上

鎌倉を出て

なごやかなる

下

下ふせ。大河溜。と今川手鳥

中

なごりれい名ふせ坂東太郎

春 上

うゐ生死の海ふ入る

中

うねり元なる波濤ふ出て

六

きのふも乾蕩ふ乃

下

みぎとは北。小舟揖繰て

四

進退こゝに谷まれり

秋節并に切りの例

（芳流閣）

六 傾く艇と立つ浪ふ

上 秋 覽丁と張り割りて

下 真直。中へ押。出されー

四 誘ふ水なる渦り舟 ウ切

三 徒方もしらずなりふり

五 ザンブと音する水烟ー

中 射る矢のめき早川の

三 声のも追風と虚激ふー

五 徒方も知らずなりふり

冬節の例

（朝比奈三郎）

四 太刀掻きそぞめ敵比奈ー

冬上 義秀莞ふと打笑ひて

中 所て蒐まる健氣さにー

下 天晴美事の勇者ぞと

賞め賞揚して放らにー

道を譲りて行き過ぎるー

心の月どこそ優れ、山越節の例

（松浦潟）

七 額ふ角貝 六 帆立貝 五 四 三

山 上 八 娘の花貝さくら貝

下 誰を待てや。まて貝や

旭節の例

三 首ふ無限の愛情を

乙 一人なりなりも連乃一

中 立つる鶴たちぬ

三 ちめすや 上ア 志賀の山櫻

（靈馬漣）

三 折まそ恥ふ石安貝 サヽヒ

中 明せぐ一人あるふの

下 ますとの。逸と知れ

（靈馬漣）

雲節の例

甲 瞬ふ少佐の尻ふ近きて

露節の例

六 さつすが 七 閑なる 六 男將 五 そ

（靈馬漣）

四 全機の戦死を遂げたり

大落しの例

（芳流閣）

此彼齊しく踏み辷りし

河邊れ方へ濱車の俵

大 坂よりの荷なる品なれば今五丁

「浪」節

（佐渡の若竹）

四 彩て敷賀を出汐や金 上

四 真帆ゑ順風の氣も手伝よ

三 君ゑ相川き名の海 中

二 水手の拍子もおもしろく今 下

三 船ゑ佐渡ゑ着き給へり今

軒雀

琵琶歌 巻の三目次

芳流閣……一頁
泉の三郎……六
備後の三郎……一三
朝比奈三郎……一六
雨乞小町……二一
鶏鵡返し……二七
荒乳の關……二四
矢口の渡……四一
菅公……四六
鹽馬連……五三
佐渡の若竹……五六
夜の鶴……六五
新年山……七一

目次

旅順の朝霧……七三
濡衣……七八
伏見の吹雪……八四
降参……九一
吉野川……九五
名誉の連……一〇一
松浦潟……一〇六
松の廊下……一一
義士の本懐……一一六
座禅……一二四

目次終

主、犬塚信乃
賓、犬飼現八
處、滸我

○本曲は或る高貴なる御方の需に應じ曲亭馬琴作八犬傳中の一節を改竄短縮したるものなり讀者若し之を原作と對照せられなば又一層の興味あらむ乎

琵琶歌 卷の三

玉蘭 達邑容吉 作歌
旭翁 橘智定 曲譜

明治三十七年七月仙臺

芳流閣

一嗚呼憐むべし犬塚信乃は
一親の遺言紀念の名刀
一心に占めつ身に傳けつ、
二艱苦の中に年を經て
一得がたき時を得てしかば、
三はる〳〵滸我へ齎して
一名を揚げ家を興すべき、
三その福はわざはひと
四ふりかはりたる村雨の
三刀は舊の物ならで、

四今や我身を劈がむー
六左れば當座の辱を
七夥多の圍を切り開らき
五輒く攀ぢつ登れども
四如何がはせんと躊躇ひつー
七時しも頃は六月二十日
又上
〜酸熱をわたる敲瓦
下
〜下には大河滔々と〜
中
〜溯洄は名に負ふ坂東太郎
四進退こゝに谷まれり〜〜
三讐となりしぞ憾なる〜
五避けなむものと犬塚信乃、
六芳流閣の頂上に
脱れ去るべき途もなく〜
しばし息をば休めたり〜
六きのふもけふも乾蒸のー
中
〜凸凹隙なく波濤に似て
登上
〜こゝ生死の海に入る
下
〜水際の小舟楫絶にてー
六折しも俄の捕手承はるー

ー犬飼現八唯ひとりー
三一層二層三層と
ー狂ふが如く攀ぢ來り〜〜
ー拿たる十手閃かし、
四組まんとすれど寄せ附けず〜〜
五疾視あふて立たる形勢ー
下
〜大蛇のねらふにさも似たり〜
ー警固の武士ども堅唾を呑みー
五如何なる隙がありつらむー
四ー發石と受留む十手の電〜〜
身を霞ませて登りつゝ〜〜
梢を傳ふ鼯鼠のー
五御諚ざうと呼掛けてー
五急遽に信乃に寄近きー
七迭に隙を窺ひつゝ
秋上
〜浮圖の上なる鶴の巣を
四廣庭に控へたる成氏公を始めとしー
手に汗握り見詰めしが〜
四信乃が切込む太刀風にー
三辷べる甍を踏み駐めて〜〜

一上一下虚々實々一
七両虎深山に挑むごき
五二龍青潭に戰ふ時
四斯やごばかり恠しまる〳〵
六棟に爭ふ未曾有の晴業
五疊かけて擊たる太刀を一
三返す拳に附け入りつ一
五眉間を望んでハタと打つ
三信乃が刄は鍔際より一
一現八得たりと無手と組む〳〵

寄せては返す太刀音被聲〳〵
六錚然として風發り
四沛然として雲起るも一
七天に聳る高閣の
五足場を揣り撓まず去らず一
四現八右手に受け流し〳〵
ヤツと被けたる聲諸共、
四十手を丁と受け留る一
あはれポッキと折れたれば一
三互に利腕確と拿り一

一三捻ち倒さむと聲合せ、
〳〵此彼齊しく踏み辷らし一
六坂より落るに異ならず〳〵
六止るべうもあらざれば、
五末遙なる河水の一
四水際に繫げる小舟の中へ一
六傾く舷と立つ浪に
秋上〳〵纜丁と張り斷りて
下〳〵眞直中へ押出されー
一誘ふ水なる洄り舟、

四揉みつ揉るゝ力足〳〵
河邊の方へ覆車の俵、
七高低險しき甍の勢
五幾十尋なる屋の上より一
四底には入らで程もよし〳〵
累り合ひつ落ちたりける〳〵
五ザンブと音す水烟
中〳〵射る矢の如き早川の
しかも追風と虚潮に一
五往方もしらずなりにけり〳〵

主、泉忠衡
賓、夫人佐藤氏
處、奥州平泉

泉の三郎

鵯越に敵營を蹂躙し、
赫々たる武勳世に比肩なく、
九郎判官義經も、
止む無く都を出汐やー
信憑る事こはなりにけりゝ
泉の三郎忠衡は、
忠孝無二の勇士なればー
固く其遺言を打守りー
○去程に賴朝秀衡の病歿を聞き
檀の浦に平家を殄滅し、
軍神と賞揚されたるー
蝸牛の双角のいさかひに
みちの奥なる秀衡に
爰に秀衡の三男にて
天資豪邁義俠にして
父秀衡が逝去の後
義經に厚く仕へ奉りたりゝ
屢密使を奥州に下し

○六親
父、母、兄、弟、
妻、子
○三寶
佛、法、僧

義經を討たしめむと謀りしかば、
遂に其甘言に誘惑され
思ひ起すぞ淺間しきゝ
まだ消ぬ殘る雪かとも
垣根繞らす柴の戸に
密議に首を鳩めたりゝ
今日の事唯父が遺命に從ふのみ
辭色激しく言ひつれ共ー
忠衡大に嗟歎しつゝ
三寶の加護なしとかや、
忠衡の長兄泰衡は
去就をこゝに決せむと
頃は文治五年四月中旬
まがふばかりの卯の花の
五人の同胞寄り集ひ
○ヤ、ありて忠衡は泰衡等に打對ひ
亦何をか議し何をか策らむと、
輒く容れらるべうも見ねざれば
于嗟六親不和にしてー
況して先考の遺命に背きー

○館は高館殿にて義經の事なり

館に害を加へむ如きー
ー吾等が決して爲し能はざる所なり。
ーたのが居城の平泉にー
○斯くて殘る四人の兄弟は
先づ忠衡を討ち義經に及ばんこー
平泉城に押寄せたり〳〵
忠衡如何に豪勇なるも
味方逐次に打死し
今や最期と見にたりけり〳〵
栗毛の駒に打騎りて

不孝不義に與せむはー
はや御暇賜り申さむこー
歸り行くこそ勇しけれ〳〵
賴朝に從ふ議に決し。
俄に三千餘騎を催して
素より不意の襲擊なれば
衆寡の勢敵し難く〳〵
殘兵僅か二十餘騎
○かゝる所に搦手より
みごりの髮を夕風に

中

〳〵くしけづらしつ紅の
ー左手に抱へ馳せ來るは
良人の馬前に駒を留め
郎君と和子に會はまほしく〳〵
未憐ながらも遁れ歸りて候と
〳〵眞情を洩らす村時雨
○流石に猛き忠衡も
今は是非なし左りこても
ーしのぶにたよりありぬべし。
妻は昂然之を卻けつゝ

下

〳〵血汐したゝる薙刀をー
是ぞ三郎が妻佐藤氏也〳〵
今一度今生にて
漸く一方切り開らき
〳〵先立つものは恩愛の
〳〵戎衣の袖に降りかゝる〳〵
斷腸の涙に咽びしが〳〵
卿は忠信が妹にてー
疾く〳〵落ちよと勸むれば
今際に至りかゝる仰ー

聞くも却々恨めしやゝ
貞節堅く義氣に富むー
左らば共々打死せむー
あの和子殘すも心苦るしゝ
後世の迷妄をはらさむこゝ
殺さるゝこもしら露か
ほゝゐむさまの愛らしさ
しばしためらふ時しもあれゝ
最はや詮方なくくもー
グサこばかりに刺し殺すー
など諸共に死せよとこころは宣はずやとー
言葉に忠衡感じ入りゝ
しかはあれ共頑是なき
寧ろ吾等が手に掛けて
寢居るみどり子抱上れば
名殘の雨に眼を覺し
いかで双のあてらるべき
敵兵間近く寄せつれば
震ふ腕に力を籠め
親の心や如何ならむー
無慚といふもたろかなりゝ
重圍を破り縱横無盡ゝ
城に歸りて火を放ちー
今もむかしの跡訪へば
盡きぬ泉の三郎が
涸れけむ後も北上の
青史に美名を留めけりくー

ヤガテ忠衡妻諸共
敵を四方に薙ぎ散しゝ
刺交へてこそは死したりけりゝ
袖に涙も湧き出でゝ
むすぶ妹背のいさゝ水
ながれと共に末かけて

主、児島高徳
賓、後醍醐天皇
處、作州院の庄

備後三郎

元弘二年春の末
畏き邊に吹きすさび、
皇帝をはるゝ〳〵と、
遷しまつらむ事の由
茲に備後の三郎高徳は
勵まし語らひ鳳輦を
船坂山にむかひしに
山陰道に方向を變へ、
聞ていづれも顔見合せ
花に厭ひし世の風も
たゞそれ多くも萬乘の
浪路隔る隱岐の國に
はや隱れなく聞にけり
義を見て勇む人々を
嶮岨に要して奪んと
警固の武士共今宿より
遷幸なし奉りしこ
さらば此より筋違に

春上
鶯の嘴のはしなくも
急げや急げと走り行く
山又山を攀ぢ越へて
武運の程をみまさかや
思ひし事は味氣なや

中
再びこゝにゆき違ひ
院の庄へ入らせ給ひけり
力も意地も挫けつゝ
獨勤王無二の高徳は
天津空迄聞こゑ上げ
そぼ降る雨にたより得て
一重の簑に身を俏し

下
鶯興ははやもすぎ坂の
かゝりしければ同志の面々
皆散々に失せけれ共
折だもあらば赤心を
叡慮を安じ奉らむこ
穂にこそ見にね荒薄
忍び寄りたる折もよし。

冬上
衛士の燒く火もほの闇く

○兒島高德題
櫻樹圖
齋藤監物

踏破千山萬嶽煙
鑾輿今日到何邊
單簑直入虎狼窟
一匕深探鮫鰐淵
報國丹心嘆獨力
回天事業奈空拳
數行紅淚兩行字
附與櫻花奏九天

中 警備怠る垣の外に　下 一本しげる老木の櫻
是れ屈竟ど肯き寄りく　三 幹をけづりて武士の一
四 取るや墨斗のすみやかに一　赤き心をくろ〳〵ど一
三 十字の唐詩書き記すへ

天莫空勾踐・　時非無范蠡へ

三 斯くなむ認め莞爾と笑み・　四 大地に撞ど平伏して一
御座所の方を拜し奉りへく　七 微臣高德報國の丹心一
五 餘人に後れは取り奉らず・　三 さはいへ獨力空拳にして一
五 回天の大御業にも一　三 微塵しるしも立難しへ
三 あはれ孤忠を憐と見まし給はれと〳〵　五 こゝろの中に奏上し〳〵

悄然として立去りけりへく　七 程なく明るしのゝめに…
六 かの唐詩の由聞召給ひ・　五 龍顏いとも麗はしくー
三 拜しまつるぞ有難きへく　四 嗟身は下ながら嬉しけれ・
五 そこど知られぬ夕露ど　春上 消にし後も香しき
中 いさをの花は長へに　下 咲きて榮ゆる作樂の宮
三 いつき祀りて敷島の一　大和心の龜鑑とて・
五 譽は世々に遺るらむ　三 譽は世々に傳はるらむ

主、朝比奈三郎
賓、北條方の將士
處、鎌倉

朝比奈三郎

三建保二年五月二日

四和田左衛門尉義盛は一

三暴に一族共を催して一

四目星と爲し〻仇敵は一

一隱る〻由を探り知り、

當時の將軍實朝の一

六此時和田義盛の三男

四南の大手に向ひしが〻

四九尺餘りの鐵撮棒を一

黃昏ごろの事なりしが、
豫て北條義時に怨ありければ、
北條の第を襲ひしも一
鎌倉山の月陰に一
四騎虎の勢止むを得ず、
御座所にこそは押寄せたり〻
五朝比奈三郎義秀は一
五原より聞ゆる大力なれば一
左手に輕く搔込みつ〻

六悠然打たせ行く狀は〻
七頓て揚るや鯨波の聲
一五荒れに荒たる如くにて、
中〻さしもに堅き岩角も
四然るに此大門は堅く鎖され一
一込入る手段のあらざれば、
一押破らむとあせれ共、
一黑鐵造の臂鐵物、
四一いづれも厭倦て見にたりける〻
○皆そこ退けやと退けつ一

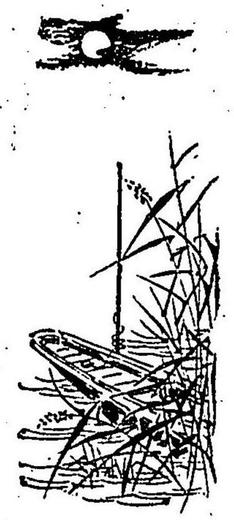
四鬼神も戰慄く計なり〻
六疾風に騷ぐあら涙の一
春上〻いといさましき勢に
下〻打碎れんけしきなり〻
四周圍は總て高塀にて一
三寄手の軍兵折り重り一〻
四棟門高き瓦葺き一
五突けど敲けど動かばこそ一
三朝比奈苛て馬より下り、
二左右の門扉に両手を當て〻

五一揺り揺ればゆら〳〵と
六二揺り目四には金剛力《
六忽ち大門破壊れたり《
一敵陣指して突きて入り《
一人馬を選ばず薙拂ふ《
五大太刀眞額に振翳し一
義秀ヒラリと打開けば《
新野が身體は眞二ツ一
六續て蒐る四五十嵐小文治《
太刀風鋭く斫込むを《
下棟の瓦は飛び散れり《
エイヤと懸くる聲諸共
四兵共續けと朝比奈は一
四鐵撮棒の當るを幸ひ一
七斯る所に新野左近將監景直、
四朝比奈目指し懸合す《
棒のあたりし所より一
切斷てこそは亡せたりけり《
新野が復讐と呼はりて一
朝比奈棒を押取り延べ一

小文治が冑の眞向丁と擊てば、
聲も得立ず死んでけり《
近づく者もなかりしかば一
七當の怨敵の北條義時を
中蛻の殼に氣も弛み
一敵將武田五郎信光に行合り《
四信光の嫡子信忠一
サッとばかりに乘出でゝ一
四太刀拔きそばめ朝比奈に一
冬上義秀莞爾と打笑て
首は胴中に埋もりて一
三この勢に怖ち畏れ、
六思ふが儘に荒廻り《
春上索めしかど空蟬の
下若宮大路に出でし時一
互に聲懸け馳寄る所に、
生年はづか十五才《
父を庇護て立ち塞り《
斫て蒐れる健氣さに一
中天晴見事の勇者そと

朝比奈三郎

下 褒め賞揚しつゝ故らに一
一心の程こそ優しけれ今
五 再び時をまつの風
三 纜ごく〳〵乗り出でつゝ



一道を譲りて行き過ぐる一
六 斯て朝比奈義秀は
四 由井ケ濱邊に兵船の
五 跡しら浪ごなりにけり〳〵
三

主、小野小町
賓、淳和皇帝
處、神泉苑

雨乞小町

抑〳〵人皇五十三代一
一水無月中旬の頃とかよ、
月卿雲客女官の輩
水の邊の草、いふ一
○偖て清涼殿の床の上に
星の光の綺羅姿、
互に競ふ言の葉は
上 いづれそれ共あやめ草
中 引きぞわづらふ鑑定め
下 はてしもなみの面白やゝ
上 池の眞菰にあらなくも
中 かりそめならぬ歌合

明治三十七年十月大阪

淳和皇帝の天長元年一
當代和歌に名譽ある
皆禁廷に召し給ひ、
兼題の歌合をば開かれたりゝ
右と左に居流れし
見るも目映き風情にて

雨乞小町

下ゲ　いと畏くも見にけりへ　斯て逐次に詠進し
今ぞあさなき唯一首　讀師の聲も朗かに
小野小町上る
まかなくに何を種とて浮草の
なみのうねくたひしげるらむ
左右の人々耳欹て　アッさばかりに感嘆し
顔見合して居たりしがへ　歌の判者は嚴格に
是こそ甚じく勝て候と　奏上したてまつれば、
帝しばくに肯かせ給ひ　龍顔殊に麗しければ
小町面目をぞ施しけるへ　斯るたゆけき大御代に

近江といふも名のみかや　君が惠の露に洩れ、
永き旱魃に湖の　水だに涸れて田も畠もー
干裂て民の煙さへー　たちまち支へ得難しと
訴願の奏聞ありければ　帝あはれに思ぼし召され、
○さらば今日の功に愛でー　小町に雨乞の歌仕れと
宣旨をこそは賜りたりへ　頓て神泉苑の池の邊に
清き祭壇取り設け、　仰かしこみ小野小町ー
一七日の潔齋祈誓を籠めー　已に當日となりぬれば、
かたじけなくも陛下にはー　百の官を從へさせー
一二條の御苑に御幸ありー　歌の示驗を待ち給ふへ

○續く日和もたのが身もー
唯一と筋に住よしやー
歌の神々いのりつゝー
小町の心ゞ健氣なるゝ
蓮の歩みのはこぶまゝ
夏上
柳の髪のいと長くー
下
衣の袖をひるがへし、
中
涼しき眸采月の眉ー
實に神々敷極みなりゝ
天打ち仰ぎ聲清く、

もゆる計りの晴の場へ
和歌の浦曲の玉津島ー
徐々祭壇に立ち向ふ
群がる人々氣を呑みてー
目離ぬ迄に凝視れば
中
白き袴にしら綾の
春上
玉をあざむく容顔に
下
現に天女を視る如く
小町は短冊採り延てー

あめにます神もみまさば立さわぎ
天の戸河の樋口あけたまへ
斯くなむ繰返し〳〵歌ひしに
愛宕山のかなたより
忽ち四方を立覆ひゝ
卍の電光眼を射て、
飛礫の如き大粒雨ー
撞ど降り來る篠薄、
山野の禽獸羽毛を伸べ
草木國土潤ひ渡り

龍神河伯の感應にや、
黒雲俄に棚引き出で
八大龍王鳴り響きー
一滴二滴又三滴ー
池の面を打つよと見にしが、
車軸を流すに異らずゝ
江河の魚鼈鱗甲を調べ、
諸民悦び舞ひ踊りゝ

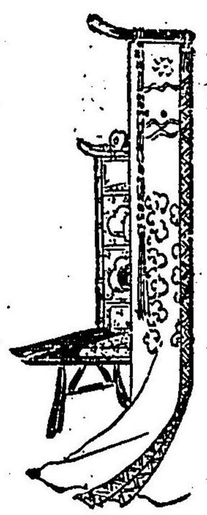
雨乞小町

黄金の雨と謳ひしは　芽出度かりける次第なり〻

是れ敷島の和歌の徳　上〻遠つむかしも今も尚ほ

下〻治まる御代のしるし迎ー　言の葉草に咲き匂ふ、

花や心ゞ種ならむ〳〵



主、比企藤九郎
寅、澁谷金王丸
處、七條朱雀

鸚鵡返し

二偖も源氏の棟梁義朝は

近江路指して遁れしが、

一常盤が許に歸しゝ後ー

遂に庄司父子に欺かれー

○茲に比企の藤九郎盛長とて

三去る保元の合戰に父を討せー

三今年すでに十九歳〻

一五夜を日に繼で都に上り

冬上〻ゆふべ小闇き編笠に

鸚鵡返し

明治三十七年十月大阪

都の合戰利を失ひ

忠臣金王丸を途中よりー

長田の庄司に手頼しも、

敢なき最期を遂げ給へり〻

二源氏重代の勇士ありしが、

止むなく北國に漂ひしにー

六源氏亡びぬと聞きしよりー

四義朝の御墓に詣でんと

中〻憂世をしのぶ羽脱鳥

下 四方に心たくつきに
四 向ふを見ればコハ如何に
我に似寄りの若侍
六 不思議に思ひ熟視れば
澁谷の金王丸に疑なし
御供にてありし筈なるに
言葉懸るも穢はしと
御墓に花奉り水手向け
七 口惜しき御有様や
三 斯く闇々とは成り給ふまじ

漸く朱雀に着にけり
三 姿も形も年輩も
卒都婆の陰に立居たり
紛ふ方なき寺友達
三 彼奴は我君御最期迄
君を討せて逃去し卑怯者
四 態と見ぬ狀裝ひて
生きたる人に物言ふ如く
五 迫て人らしき者一人御供せば
四 金王とかいふ粒丁稚

病者の腰拔
頼みに召連れ給ひし故
秋上 勘忍ならぬ當言し
下 涙を浮べ申しけり
左あらぬ體に香花を捧げ
三 口惜しの御有様や
五 當座に腹切て冥途迄
二 死は易し存生へて
御恥辱を雪がんと
御家人共は散々に成り

三 人でなしと知り給はず
不覺の御最期是非なしと
中 尻目に睨らむ眼より
四 金王丸怫然とせしが
三 ヤナヲ卒都婆を伏拜み
七 長田に討れ給ひしと聞き
三 たん供とは存ぜしも
今一度源氏の御代と爲し
三 斯の體には候得ども
四 有る甲斐もなき役に立たず

―藤九郎といふ素丁稚―
四口先きの廣言ばかり―
六尻目に睨付け申けり〳〵
四○拔かぬ太刀の高名―
四草葉の陰にて可笑たぼされん〳〵
―四生命を捨つる程ならば、
―討つに討たれぬ事やはある〳〵
牛馬に劣る人外と思召せ―

上〳〵言ひも未だ卒へぬ間に
四○口先程便好きものは候はず〳〵

臆病の大腰拔者、
四源氏の御運の拙さよと、
三盛長再び御墓に向ひ〳〵
腕なしの狼狽漢―
三死は易しと申せども―
長田奴に羽翼はあらじ―
三左はいへ四武士と思へば恨も候へ、
本意は某遂げ申さんと、

下〳〵金王復も御墓に打向ひ〳〵
三斯まで心剛ならば

父も討たるゝ合戰に―
四戰ごいへば逃足速く
逃吠の犬侍臆病〳〵と笑ひげる〳〵
四○犬侍とは誰が事ぞ、
○人外とは誰が事ぞ、
五○オ、犬侍とは盛長が事よ〳〵
五今一言いふて見よと、
五金王丸故と冷笑ひ〳〵
―犬に似合た尾を振れと、

中〳〵太刀の柄も摧けむ計り―

五など高名はせざりしぞ〳〵
六詩ひ過ぎての四棒ちぎり―
六盛長今は堪へかね、
五金王丸聞きもあへず、
四○オ、澁谷の金王が事よ、
七盛長腹に据にかねて―
六太刀に手を掛け詰寄れば―
五無益の四太刀を拔かむより―

冬上〳〵兩方りきむ居合腰

下〳〵握りひしぎ身を震はし―

四たがひの心探り合ふー
四盛長やがて打笑ひ、
ー爭ふも益なきのみか
をがまするも勿體なしと、
ー隻手に引抜き行んとす〳〵
四○汝の如き腰拔者にー
ー卒都婆を取て引留る〳〵
大エイヤ〳〵と捻ぢ合ひたり〳〵
ウンと喚て捻ぢければ、
ー中よりフッツと捻切てー

擬勢の程ぞ頼母しき〳〵
四○汝の如き卑怯者こー
四源氏の大將の御墓をー
五一丈有餘の高卒都婆ー
六金王丸も打ち笑ひ〳〵
君の墓標は渡されしこー
七揃ひも揃ひし古今の大力
左手もちり右手違ひー
四方八寸の角卒都婆ー
小踊してパッと退き、

双上〳〵双方睨んで立たるは
三少時言葉もなかりしが
三○頼母しや澁谷の金王丸
七○嬉しや比企の六藤九郎
三雑言過言も忠節の
冬上〳〵互に晴れしと打笑ひ
下〳〵武運を祈り右左ー
五別れて行くこそ殊勝なれ〳〵

下〳〵人間業とも見にざりけり〳〵
一度に涙ハラ〳〵〳〵
心底確に現はれたり〳〵
五汝が心も見届けたり〳〵
思ひに餘る疑ひも
中〳〵心を合せみなもとの
三復た再會を誓ひつゝ

主、辨慶
義經主從
賓、井上左衛門
關守
處、越の國荒乳
の關

荒乳の關

乙西海の怒濤繦に鎭り
二今此時機よ惹き起すー
ーあはれ戰功ならびなく、
ー九郎判官義經も、
ー世の仇浪に搖り揉れー
六時しも頃は文治二年
夏上名殘惜しくも今出川
下消てはかなき粟田口へ
五いつか大津の浦越へてー
東海の覇業將に成らむこす、
逆櫓の怨讐取り楫にー
三名聲天下に耀けるー
三兄頼朝と不和を生じー
流涙の身とは成り給へりへ
五如月十日の夜深きに
中流れ行く身は泡沫の
七また來む時をまつざかや
四行方も今はしらひげの、

六神の御社伏し拜みー
三海津の浦に着き給ふへ
四ゆけば程なく越の國
中漸くこゝへきたの腰
四折しも行交ふ山賤等ー
○悼はしや今の修驗者共
判官殿こうたがわれ、
義經聞て辨慶を招き給ひへ
ー我等を堅く撰ぶ由、
四偖は君の御下向を計りー
四寄邊と頼む甲斐もなきー
三頓て陸路を急ぎつゝー
秋上峯吹く風のあらち山
下三の口へも近づけりへ
ひそめき乍ら袖を引き、
行く手の關に懸りなばー
憂き眼にあはんと耳語けば
○此先きに新關を設けー
いかにせばやと仰せけるへ
俄に構へしものと存候、

唯打破りて御通り候事ー
行く方遠き旅の空
機に臨み變に應じ欺りてー
辨慶の一議に任せ
中 我から向ふ燈火に
○茲に加賀の國の住人井上左衛門は、
心ならずも山伏をー
七 斯る所に義經主從來りければ
四 前後左右を拝取圍み〻〻
左衛門徐に制しつゝ〻
容易き業には候得共、
末こそ殊に大事なれば、
靜に御通り然るべしと、
夏上 こゝろ強くも夏虫の
下 悠然として進み寄る〻〻
鎌倉殿の嚴命に依り
詮議の爲めに控へけり〻〻
五 スハヤこばかり關守共
是こそ判官の正身よと犇きたり〻〻
○いかに客僧達是は關にて候ぞ〻〻

○承り候、左り乍ら我等はー
何迚斯程に騒動せられ候や〻〻
奥秀衡を賴み御下向の爲め
左衛門承りて山伏を停め候也、
いかで羽黒山伏の停めらるべきと、
ー左衛門少時傾き居たりしが、
ー異議なく通し申すべし、
ー高下を嫌はず關手を取りて
先づ關手を出し給へと申ける、
いつの習慣に羽黒山伏のー
羽黒山伏にて候に
○いや今度判官殿僞山伏と成り
山伏を堅く撰べとの仰に由り
○左らば僞山伏をこそ停め候へ、
辨慶稍氣色ばみて申ければー
○イヤサマ客僧達は眞の山伏にておわすらしー
左り乍ら鎌倉殿の御教書にー
關守等の兵粮米にせよとあり、
○偖も新しき事を承る物かな、
關手を出す法やある、

○關手は關の通行稅なり

例なき事は叶ふまじと、

○然らば關手を取ると取らざるは此に一同を停置くべしと、辨慶等少しも驚かず御使上下の程心易く息らはむこと

秋上 ～思ひ〳〵に寢つ起きつ

下 ～大膽不敵の有樣なれ

○是は判官殿にはたはさぬ氣也急ぎて立たむ氣色もなく齋料に事缺き候へば

辨慶更に取り合はず、關東へ左右を承り合し候迄左衛門儼かに申したりへ

○是は金剛童子の御計らひにや各笈を關屋に舁入れ

中 ～したり顏に振舞ふこそ關守共今は氣を奪れ唯通せやと纔に許され給ひしが

○この二三日の間關屋の糧米少し賜はれと

餘儀もなげにも申けり

○物も覺にぬ山伏かな

口强に返事を爲し

如何にも心得難しと拒みしが

○何にも御祈禱にてこそあれ

四 唐櫃の蓋に白米盛て差出す

○ヤア大和坊ソレ取れと

三 義經謹みて請取り給ふ

六 辨慶頓て腰の法螺貝取出して

いと尊げに祈をこそは始めたり

關守共あきれたる顏色にて

判官殿かと紛せば

其上齋料迄乞ふ事

左衛門莞爾と打笑みて

それ進らせよと言ひければ

辨慶これを受けて

態と義經に荒々敷申けるに

心の中こそ痛ましけれ

五 たびたゞ敷吹き鳴らし

○日本第一金剛童子

葛城は十萬の滿山の護法身、
初瀬は十一面觀音
比叡山王七社の宮へ
荒乳の關守留させ奉りー
羽黑山の讃岐坊が
晻阿毘羅吽欠と
中〜賴母しげにも關守等
漸くにして一同笈を負ひー
四 盡きぬ武運や源のー
加護もあらちの關越へて、
奈良は七堂の大伽藍
稻荷祇園加茂春日大明神
○願くば判官此道に懸參せて
勳功拔群ならしめ
驗德の程を示し給へ
冬上〜珠數サラ〳〵と押揉めば
下〜聽問せしこそ笑止なれ
悠々として通りけり、
氏を守りの弓矢神
五 落ち行く姿ぞ勇しき三〳〵

主、新田義興近臣十餘人
賓、竹澤良衡少將
處、武藏矢口の渡
○新田義興は義貞の第二子なり、本曲は大日本史に據る

矢口の渡

明治三十七年十一月大阪

儲ても新田義興は
鎌倉を奪はれければ
武藏相摸の間に匿くれ、
一尊氏深く之をたそれ、
甘言以て利を昭はし
されば良衡利に迷ひー
義興にこそ進めけれ、
いつくしき名も少將ごて
正平七年賊將尊氏の爲め、
十有餘人の忠臣と、
再擧の準備怠らねばー
新田の舊臣竹澤良衡に
義興を擊たせんと謀りたり、
たのが養ふ上臈を
○そも此上臈や誰ならむ
都に生ひし室の梅
中〜袖ぞゆかしき人の花
春上〜まだ春風もしら綾の

○月東山、前赤壁賦

下〜綻び初めむ風情なりへ
ー家に往き來の重なればー
觀月の宴に事寄せてー
用意隈なく整へたりへ
月東山の上に出で
白露江に横はり
招きに應じ義興はー
少將より密書來りければー
妾昨夜惡しき夢を見たり
○世にもあやしき文のあやー

去程に義興遂に少將のー
窺ふ機會もよしひらは、
渠を刺さむと兵を伏せ
○恰も時は菊月十三日
斗牛の間に徘徊し、
水光天に接す、
すでに往かんとせし處に、
訝しみつゝ披き見るに、
郎君今宵何方へも出る勿れと
遂に思ひ止まり給ひしこそー

ー少將の眞の情と知られけれへ
又少將の密書を通ぜると聞きー
○慈愛容赦もあら繩に
秋上〜漸く咲きし一ことひらの
ー無慘といふもたろかなりへ
矢竹心に義興はー
唯疾病の由告げ來してー
程經て良衡訪ひ來り、
尊氏に宿怨ありて謀叛を爲し
疾く〜鎌倉を襲はるべしと
左れば良衡大に望を失ひ
陰謀是より漏れんかと、
姫を縛めさいなみつ
下〜梅をはかなく散らしゝはー
斯るべしともしらま弓
姫に書をば贈れども、
空しく時を過しゝが
已が從弟江戸高重なる者
公に内應すべければ、
まことしやかに申けるへ

○左ばかり義興はー
頓て親ら近臣十餘人を率ひー
ー正に中流に至りし頃、
船底を塞ぎし栓を拔きー
○此時両岸に良衡の伏勢起り〳〵
枯野の薄に異ならず〳〵
船は逐次に沈み行きー
進退こゝに谷まりて〳〵
今見よ汝に復讐せむこー
○時しもあれや黑雲卷出で
良衡等を先發せしめ、
矢口の渡に差懸りー
豫てたくめる水手楫取
水を潛りて遁げ去れり〳〵
船を目指して射掛る箭は
○義興主從あせれども
いづれに寄せむ術もなく〳〵
義興良衡を打睨み、
敢なく自害し給ひけり〳〵
天に轟く雷諸共

○新田大明神の社殿は武藏國荏原郡矢口村に在り

義興の靈姿虛空に現れ、
忽ち良衡を粉碎したりしは
○その後此わたりに
里人社殿を河畔に建て
秋上
身を沈めても梓弓
下
浮かびて清き御社のー
荏原に高く留めけり
憤怒の形相すさまじく
心地よかりし次第なり〳〵
奇怪の惡靈崇りければ
新田大明神と祀り奉れり、
中
矢口の渡今も尙ほ
影もはたゝく神の名を、
荏原に長く遺しけり

菅公

一抑菅原の朝臣道眞公は
一生得聰明にはしければ、
三遂に右大臣に進ませ給ひ、
六月にも雲の障碍ありへ
四讒言の爲め官職を停められ、
四太宰の權の帥にー
七左れば道眞無實の汚名を悲て
三身に過失のなき由をー
三流れ行く身をせき留めむー
三重き勅宣かしこみつー
五さらばこばかりゆふ暮にー
六年來愛づる梅にまで
七希望空しく絶にぬれば、
三多數の子女等に哀別しー
五紅梅殿に出でさせて、
五深き契を籠め給ひへ

三東風吹かばにほひたこせよ梅の花
三あるじなしとて春なわすれそへ

七待たぬその日も六濡衣も
ア上初の一と日の夕まぐれ、
下あとをみやこの影消にてへ
秋上とく〳〵下る早舟の
中つきぬ名殘に幾度も
甲ともす燈火とも綱を
中浮ぶ瀨もなき淀川や

○亭子院に捧げ奉れる歌
流れもく我身
藻屑となりぬ
とも君しから
みとなりてと
ゝめよ

○昌泰三年二月朔日都を出で筑紫へ赴く

下 ながれも清き岩清水へ
三 大江にこそは着き給へり〳〵
五 みをつくしてやこひ渡る
中 行方しら浪ほの〴〵と
山上 通ふ千鳥も夢の間に
下 畫く繪島に文字の瀬戸へ
渡れば見ゆる地の島やへ
中 名も大しまのなつかしく
七 奈多の濱邊に漣の
夏上 廻れば晴るゝ箱崎の
三 高き御影を伏し拜みー
六 ○またも浪速を出汐の
冬上 芦分け小舟楫を絶に
下 明石の浦や淡路島へ
中 室の泊をよそに見て
乙 ○沖の鷗も六連島
春上 よしやあしやもわかねども
下 藍のしま蔭風なぎて〳〵
五 寄せては返す志賀のしま
中 誰まつ風も吹かなくに

○不出門　菅公
一從謫落就柴荊
萬死兢々躊躇情
都府樓纔看瓦色
觀音寺只聽鐘聲
中懷好逐孤雲去
外物相逢滿月迎
此地雖身無撿繁
何爲廿步出門行

○秋夜　菅公
黃萎顏色白霜頭
況復千餘里外投
昔破榮華簪組縛
今爲貶謫草菜囚
月光似鏡無明罪
風氣如刀不破愁
隨見隨聞皆慘慄
此秋獨作我身秋

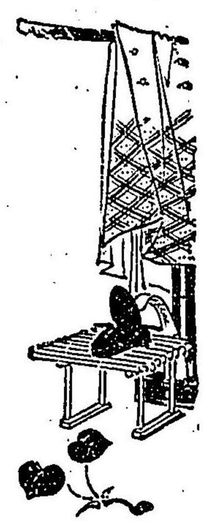
下 漸く博多へつくし潟ー
三 しばし息らひ居給ひけりへ
四 謫落柴荊に就きてより
七 ほこり間近き都府樓だも
三 又觀音寺の鐘の聲もー
乙 只管謹慎してはしゝがへ
中 なくほとゝぎすをちかへり
三 そよぐ夕に身にぞ沁む、
七 愁を破るちからなくへ
二 鏡の如く清けれどもー
一 警固の武士に扶けられー
四 ○去る程に道眞公は
三 門を鎖して出で給はずへ
五 瓦の色をながむるのみへ
朝な夕なに聽くばかり、
月上 うつる月日に關守の
下 夏去り秋こならの葉のー
五 風は双に似たれども
三 月の光はいたづらに
罪を明かさむ影もなしへ

○大江千里
月見れは千々に
物こそ悲しけれ
我身ひとつの秋
にはあらねと

○菅公
宵のまは都の空
にすみもせん心
つくしの有明の
月

六あはれ見るもの聞くものもー　五涙を醸す種なれや《
三我身ひとつの秋かともー　三千々に物こそ悲しけれ《
四恰かも菊月十日の夜、　四月山の端に澄み上りー
四露けき袖に影とめて《　三去年の今宵に賜りしー
三御衣を恭しく捧げ出で、　四ヤガテ容儀を改められ《
去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣猶在此　捧持毎日拜餘香
四斯くゞ微かに詠吟しー　深き愁ひに沈ませける《
七心づくしの有明の　六月も都の雲に銷されー
五空しく過る憂き年もー　三延喜三年となりけるが《

三終に赦免の御沙汰なく　三謫居のまゝに香に匂ふー
五梅ははかなく散りにけり《　ア上花は散りしも後の世に
中のこるかをりは久方の　下天満宮と仰がれて《
五幾萬代の末までも、　三輝く光ぞ尊とけれ



主、漣(馬名)
賓、伊藤亮五郎
處、滿洲張貝堡

○本曲は左の明治三十七年十一月廿二日發行大阪毎日新聞松内冷洋君の戰陣餘錄に據る

伊藤少佐と愛馬

伊藤砲兵少佐の戰死も亦た悲慘なりき。一兵少佐の前に進み、水郡上等兵が勇敢なる戰死のさまを報ずるや、この時まで塹壕内に在つて指揮しつゝありし少佐は『ムゝあの水郡大尉の弟かそれや可愛さうぢやつた、……ドレ乃公も一番戰況を見て遣らう』と直に壕を立出で、やをら小高き陣地にのぼつて双眼鏡を眺め、豹さんとする咯、砲彈殷々風を切つて飛來すると見る間もなく、今少佐の立てる頭上にパッと爆發し少佐の勇姿は酷き煙のうちに包まれつゝ遺骸はやがて殘部を抉られ殘胸部は少佐に愛馬あり、慘哉。漣といふ、鹿毛の駿足なり、こゝの日砲列の後方に繫置けるに、少佐の最後と時を同じくして、何もものにやて驚きけん、遽に

靈馬漣

乙 人こしいへど人ならぬ—
—江に手馴の水飲ひし—
三 語るもなか〳〵あはれなり〳〵
五 神無月の十四日
四 馬の主は伊藤砲兵少佐にて—
—打跨りついさましく—
七 さして行方は我軍の
中 腹帶もけふは彌緊く
巻上 まだほのぐらき月鹿毛の
下 蹄に砂塵をたてがみや〳〵
六 續くつはものエイ〳〵こ—
四 寄せてはかへす漣の—
—天地も震ふ勢なり〳〵
四 山の麓に下り立ちて—
○ 是れ漣よ能く聞けよ〳〵
野にも山にも伏すこてもー
六 盡すまことは千早振ー
七 さはいへけふは敵陣に
—汝を恃む際ならず〳〵
人もある世に鳴絲の—
駒のこゝろの懷しさを—
三 頃は明治三十有七年—
四 しかも沙河會戰の第五日、
三 たのが愛馬の漣に—
三 翻りながらに出陣せり〳〵
又上 しめし陣地や梓弓
下 轡の響き戛々と〳〵
中 駿馬のあがき冴渡り
七 招く尾花にはげまされー
五 押すや砲車の軋る音〳〵
斷く聲と諸共にー
四 斯て少佐は陣地なるー
愛馬を繫ぎ別を惜み〳〵
四 汝と吾は束の間もー
三 離れがたなみ大君に、
五 神こそしろしめさるらめ〳〵
五 此上なう近き塲所なればー
四 しばしが程は別るゝもー

嘶き狂ひ、四足をあがきつゝ繋げる頭絡振切つて暴出しけるに、從卒狼狽すてゝ、取押へんとすれば、蹴退けさまゝ、眞一文字に陣地目がけて躍入り、少佐の遺骸のほとりに達するや、ヒタリと脚をとゝめ、狂奔の狀は何處へやら、頭を下げ目を閉ぢつゝ、少佐の身邊を嗅ぎ廻し、果は血に浸されたる征衣を噛んで、右に左に振試みしが、一聲悲氣に嘶きぬ。

アヽ漣は愛主の暴出の死を知つてあらざるにあらざるか、愛主の死を見て悲哀の狀をなすにあらざるか、並居る戰士精深し、戰士將卒相顧みて思はず征衣を絞りき、やがて少佐の遺骸を昇き上げるもの、恰も生けるもの如く、漣の鞍の上に、打跨がせしに、彼は漸く意を得しもの如く、頭うなだれ、とぼ〳〵と歩みて、遺骸を運びぬ、鞍上の少佐また生けるが如く、鐙のあたり拍車の音蕭々たり。

○伊藤苑五郎君は我學友工學士伊藤隆三郎君の季弟にして第四師團砲兵大隊長たりし也

○陸軍大尉水郡富三郎君は大阪府下南河内郡川西村字甲田の人なり

三ヤガテ凱旋するまでは一
五又吾兎も角もなる時は一
二妻子の三許に送れかし〳〵
愛馬の蜜撫擦すれば、
六なごり惜しげに我主に一
三首に無限の愛惜を一
乙人ならなくも漣の一
下〳〵まことの色と知られけり〳〵
一敵軍最とも優勢にて〳〵
一同苗上等兵喜市も戰死の由一

こゝに鎮り待ちてよや〳〵
五我なきがらを故郷の一
三ヤヨ漣よ聞き分きしかこと一
五馬はさながら物言ふ如く〳〵
五纏綿れ寄りつゝ三低徊るゝ、
三しめすや上志賀の山櫻〳〵
中〳〵立つる蜜たちまちに
かゝる所に陣地より一
水郡大尉の舍弟一
報告連りに來りければ、

六イデヤこばかり夕鹿毛に一
四こゝろの駒は狂はねど一
一鞭打つ如く五振り放し、
四しばし奮戰したりしが一
三あはれ少佐の胸板を一
六何かは以て堪るべき一
四無慘の戰死を遂げたりけり〳〵
四繋げる愛馬漣は一
六一こと聲高くむせびしが、
一留むる馬丁を跳退け蹴退け〳〵
五別かれて少佐は去なむとす、
手綱引るゝ我胸に一
五陣頭にこそあらはれ出で〳〵
虛空に響く敵彈は〳〵
ハツシこばかり擊碎けば一
六さすが七聞ゆる六勇將も五
三時しも四あれや後陣に一
何物にか驚きけむ、
五忽ち頭絡振り斷りつ一
陣頭指して驀地一

六狂ひ猛りて馳せ登るべ
五頭を下げつ眼を閉ぢつ
四愁然として立たりしが
四物言ひたげに頭を寄せ
三ヤガテ軍服の襟咬へつ
五その心底のしをらしやべ
五馬の心を酌み量り
四斯くする隙も打しきる
四斃さむ事の可憐ど
四愛馬の鞍に舁き乗せて

七瞬間に六少佐の屍に近づきて
五流れし血汐を嗅ぎ廻りべ
五遂に屍を揺り動しべ
悲しき鳴聲振絞りべ
扶け立てむと試むる
七並居る六勇將五猛卒も
三征衣の袖を浸しけりべ
四敵の砲火に此馬まで
五少佐の遺骸を其儘に
三從卒をして引かしむれば

五漣漸く意を得つ
トボ〳〵として下り行く
後姿ぞあはれなりべ
七千里の馬は六古けれども
六かゝる靈馬の新らしく
五この聖代に出るこそ
夏上義を重んずる日の本の
中ますら武夫のひたすらに
下物のあはれを知る故と
三千代萬代の末かけて
五戰語に遺るらむ三〳〵

主、日野阿新資朝
賓、本間三郎入道
處、佐渡

○金葉集 小式部内侍
大江山いくのゝ道の遠けれはまたふみも見す天の橋立

○相川 佐渡の港名

佐渡の若竹

一扨ても日野中納言資朝はー
乙北條高時を誅せむと謀りしも、
二佐渡が島に流されてー
三程なく亡はるべきのよしー
四茲に資朝の一子阿新は
三母に從ひ仁和寺のー
六風のまに〳〵聞こゝ來るー、
五生前父に謁ゝ度しとー
一老僕一人召し具しつー

後醍醐帝の密勅を奉じー
一中道にして事顯はれー
本間山城入道の爲め、
仄かに都へきこゝけりゝ
當年甫めて十三才、
邊りに隱れ居たりしが、
五佐渡の悲報に心も消ゝト
漸く母の許容を得てー
遙々佐渡へこゝろざしー

一都をこそは出でにけりゝ
夏上
島にうきねの父君に
中
一と日もはやく大江山
下
いくのゝ道の遠ければゝ
三ふみもならはぬ草鞋にー
七行方もしらぬ六由良の戸をー
三想ひやるこそあはれなれゝ
四斯くて敦賀を出汐や
五こがれてこゝへ越路の旅ー
三君に相川きたの海
三難なく佐渡に着き給へりゝ
四ヤガテ阿新本間が館を訪問てー
具に事情を申ければー
三疎かならず待遇しゝもー
一入道不憫とや思ひけむ、
四父子對面の事のみは、
關東の聞ゝも如何とて更に許さず〳〵

七然るに資朝は我子の尋來し由を聞きー
三速かに對面せしめられ度こ
入道遂に許るさゞれば、
六しらぬきのふは兎も角もー
五一つ島根に在りながらー
六さすがに猛き資朝もー
三道理せめてあはれなりゝ
四今しも本間三郎といふ者ー
ー害し奉らむよしきこゆればゝ
五警固の武士に遮ぎられー
五夢かこばかりよろこびつゝ
三さまゞなげき聞ゆしも
四扨ても情なき事かなゝ
五けふは我子のしたひ來て、
三相見む事も叶はずやこゝ
五不覺の涙に暮れにしは
四時は元弘元年五月廿九日の夕まぐれ、
資朝卿を牢屋より出しー
六阿新狂ふが如く走せ出るをー
三齒がみなしてぞ居たりしがゝ

三ヤガテ遺骨を送られければー
七あはれ今生の對面叶はずして
六身を顫はせて泣き沈むゝ
三たもひやるだに遺憾なりゝ
ー父の遺骨を老僕に持せ歸らしめゝ
ー尙ほも本間が館に留りて、
四夜はひそやかに忍び出で、
ー遺恨の一太刀酬ゐむこー
四或る夜天の惠か烈き雨風ゝ
四拔き足指し足入道のー
五阿新取りて抱き締めゝ
五變る白骨を拜む事の悲しさよこ
三心の中の本意なさをー
四去程に阿新思ふ所存のありければー
四たのれは勞はる由を申しー
六晝は終日臥し暮しー
三間隙だもあらば入道にゝ
四その機會を窺ひしがゝ
七是れ幸こ阿新は
寢所に狙ひ寄りたれど、

四本間が運や強かりけむー
二コハ殘念と次の間を索るに〳〵
唯一人臥したりければー
七擊て日頃の遺恨晴さむこ
中〳〵身に寸鐵を帶びざれば
ー如何はせんと案じ煩ふ折もよし、
ー是れ屈竟と肯きつ、
三蛾は忽ち飛び入りてー
〳〵仕合よしと探り寄り〳〵
五寢たる者は死人に等し
四何處に行きしか影もなし〳〵
父を斫りたる本間三郎〳〵
三是も時に取りては父の敵、
夏上〳〵心は矢竹に逸れども
下〳〵他人の得物を頼むのみー
四障子に群がる燈蛾ー
二障子を少し引明くれば
四燈火をフット打消したり〳〵
六刀を奪ひ拔き放ち
四イデ驚かし呉れむずと〳〵

四枕をハタと蹴り退ればー
五エイと肩先斫り下げつ〳〵
四ひるむ所に附け入りてー
四靜かに竹叢に隱れたり〳〵
ー周章狼狽出あひて〳〵
ー正しく阿新の所爲と知れければ〳〵
五手に〳〵四松明振りかざし三
ー危かりける次第なり〳〵
〳〵館を廻らす堀廣くー
四斯てヤミ〳〵擊たれむよりー
三郎驚き起たんとするを、
返す刀に利腕をバランズンと切落し〳〵
喉笛グサと突通し〳〵
四此物音に宿直の面々ー
血汐に染まる足跡にー
探がし出して打取れとー
木蔭草蔭探がしゝは
四此時阿新キットたもふ樣、
遁れ出づべき途もなし、
自害なさむとしたりしが。

三 いや〳〵死は易く生は難し
六 堀のほとりに梢靡く
秋上 〳〵不思議や竹は漸次に傾きて
下 〳〵稚児をば渡し下しけりゝ
中 〳〵危きふしを遁れしも
三 たけきいさをのしるしぞこー
五 ほまれは世々に遺りけり

如何にもして逃れて見むこゝ
四 竹にスルリと攀ぢ上れば
中 〳〵彼方の岸に易〳〵こゝ
春上 〳〵靡き渡しゝ若竹に
下 〳〵心のたけのたわみなき
幾千代かけて此君の
三 ほまれは世々に傳はりけり

主、常盤御前
今若
乙若
賓、平清盛
處、六波羅

夜の鶴

夜の鶴

凡そ義の爲めに道を忘れ
例をこゝに姫小松ー
遺愛の三人の兒こー
老母は其爲め囚はれてー
嗚呼孝ならむとすれば慈ならず
ー寧ろ孝道の爲自首せむこ
○かくて常盤は舊主なるー
妾幼兒の愛にまよひ
みづから故に罪もなき

明治三十七年十二月大阪

道の爲めに義を忘るゝの、
引くもゆかりの常盤御前、
大和に忍び居たりしが、
きびしき析檻受るこ聞き、
慈ならむこすれば孝ならずー
三兒を携へ出でにけりゝ
九條の女院に謁へ申上けるは、
今迄或る邊陲に隱れしも
老母の憂目を悲しみて

はる〳〵まかり上りて候、

母の憂苦を救ひ給はれこ

〻いこもあはれにきこゆけりへ〻

常盤の孝道に感激し〻

上

〻出して遣るも遣らるゝも

下

〻馴れし古巣も見納めこへ

後見送りて入りかぬる

〻小歌は更に見にざりき〻

今若乙若に打ちむかひ〻

いつかは捜し出されて

我等親子を六波羅に送り

〻誠を籠めし言葉の色

されば女院を始め女官等も

衣裳を調へ清車に載せ

中

〻ともに涙にくれ羽鳥

打ふり返りながむれば

人もなさけのむち時雨

常盤は漸く涙を收め

○御身達は所詮逃れぬ平家の敵

亡はれむは定の事、

さるに由て今より名乗り出でんとす、

朱鱗の擧動し給ふなよこ

美事腹切て見せ申さむこー

さすが源氏の後胤なりこ

つらき涙を押しかくしへ〻

母もこも〻死出三途

知死期待間ず悼しき〻

めぐりて早き六波羅の

○妾幼兒を具して遁れしに

今日は其兒を携へて

幼少ながらも大將の兒なれば

いはれて両兒は聲揃へ、

臆する色も見にざれば

おもへばまたも湧き返る

よくも申して給はりしよな

渡るも今日かあすか川

うしや憂世は小車の

取次の役伊勢守景綱に對ひ、

老母を囚へ行方問はせ給ふ由

自ら此まで参りたりこ訴へけるへ

○清盛ヤガテ親子を引き見るに
牛若を懐中にいだき
老母は何の罪もなし
我等親子を御成敗なし給はれよ〳〵
何卒妾を先にしてー
一樹の影一河の流
況して親ごなり子ごなりしは
卑怯ながらも隠れしは
子ゆへに迷ふ夜の鶴
こらへし涙せきあへず

常盤は今若乙若を左右に坐せしめ
いとしとやかに申けるは、
願くは疾く御宥し給はりて
但し一つの御願には
和子等を後に殺してたべ〳〵
他生の縁と聞くものを、
深き先縁のあるならむ〳〵
皆妾が淺慮にて
推量してや人々と、
むせび伏したるしをらしさは

上〳〵常盤の松も一トしほの
○今若母を見上げつゝ
いふ傍より乙若も、
涙充溢湛ゆる眼をー
常盤はます〳〵咽せ返り
情の涙の打ち寄せしー
上見ぬ鷲の清盛も、
いかで涙のなかるべき
退去りていつか影もなし〳〵
終に常盤の色香に愛で

下〳〵色まさりたる景色かな〳〵
泣かで能く申させ給へやと
母上我は泣き候はずと
押へていへるいぢらしさよ〳〵
またいふすべもなかりしが、
白洲に立てる白鷺もー
木石ならぬ浮世の人
席にもゐ堪へずロッ〳〵と
名のみは清き清盛も
老母も稚兒も其人も

釋るす事ごはなりにけり。

上 たもはぬ方に指す船も

中 すてゝみさをのたちまちに

下 またも輝く白旗の

起因をこゝに開ちきしは

折られて折れぬ栞なり〳〵

新年山（勅題）

明治三十八年一月大阪

朝日まばゆき大空に　友よびかはす友鶴の
聲豐かにも聞ゐつゝ　君が代謠ふ髫髮子の
百よろこびと打交り　實にも長閑き御代なれや
匂ふ霞のひま洩れて　富士の高嶺に新しき
年の光のうつろへば　輝きわたるしら雪の
きよき姿や日の本の　恐きしるしと仰がるらむ

主、旅順攻圍軍
賓、ステッセル夫妻
處、旅順口

旅順の朝露

三我勇敢なる攻圍軍は、
破竹の勢にて二龍山を奪ひ、
目出度明治三十八年の
七はやさしのぼる初日影
中四方の山々うるはしく
四時しもあれや打出す一
一百一發の實彈にて、
一振古未曾有の猛勢に、
七旅順の生命と聞にたる

爾靈山を占領して以來
又松樹山を攻め取りて
元旦を迎ふる事とはなりにけり〳〵
巻上御國の旗にうつろひて
下實にもまばゆきけしきなり〳〵
我各部隊の祝砲は一
四山鳴り響き谷應へ一
五何かは以て堪るべき〳〵
六彼の望臺も打碎かれ

五我占領にぞ四歸したりけ〳〵
五山の麓の幕營に
夏上ステッセルを始めとし
下其他の將官八九名一
一打沈めりても見にけり〳〵
三嗚呼勇壯なる諸君は
今日迄能く防ぎ給ひしも、
四言ひも未だ畢らざるに、
六此會場間近にて一
七膽を冷し、六人々も
六かくこも知るや白玉の
四寄り集ひたる敵將は、
中フオーク、バラショフ、スミルノフ
三今や最後の軍議の場一
三漸にしてステッセル申出けるは、
四日本の强敵を引受けて、
三尙ほ此後も戰ひ給ふべきやこ一
五我猛烈なる砲彈は
ドツトばかりに破裂せり〳〵
五流石は露軍の將官こて

五 静かに軍議を磬しゝも、
三 恃みと爲しゝ海陸の
一 最早抵抗の力なしとゝ
三 降服と決定したるこそ、
三 頓て一同慨然として起立をなし
一 各〻姓名を記し畢りゝ
一 降服の議を日本軍に一
四 かゝる所にステツセルの夫人、
一 四 決議の模様如何にやとゝ
五 手負の看護孤兒の一
四 兵力は衰へ糧食は盡き、
四 援軍とても來らねば一
六 終に萬斛の恨を呑みて、
四 是非もなかりし次第なれゝ
三 涙ながらに決議書に一
三 直に一士官に命を含め一
傳ふる事と爲したりけるゝ
四 樣子ありげの今日の軍議一
六 打續きたる敗軍に
三 救助に疲れし身ながらも、

三 氣遣はしげに入り來りゝ
五 ワツトばかりに泣き伏せば、
三 一同涙に暮れにしがゝ
五 遊び居たりし孤兒共、
三 バラ〳〵と縋り寄りゝ
五 ともに殺しゝ日本人一
四 譯も知らずに聲々に
六 鬼神もひしぐ勇將も一
二 悲しき孤兒抱きしめ
下 小獸は更になかりけりゝ
三 事の概略聞きもあへず一
六 又今更の心地して一
七 夫人に從ひ餘念なく
五 此有樣にたゞろきつ一
三 是伯父上吾等の父や母迄も一
また誰をか殺し候やと〻
五 問ひつ叫びつ泣き出せば、
五 いかでか泣かで居らるべき、
冬上 連れて共音の蟬時雨
四 去程に攻圍軍の大將乃木將軍は

四 寛大仁慈の、勅諭を奉じー
上 きのふまでもけさまでも
下 敵や味方の雄詰びもー
六 わきて我皇軍の將卒はー
四 さしも執念き敵軍をー
上 愉快に愉快を打重ね
中 歡呼の諸聲彌高く、
下 湧きも返らむばかりなりゝ
六 東洋一の名城も
中 脆くもちらふ露の玉
上 敵の降服を聽るしければ、
中 擊ちつ擊れし砲臺も
下 忽ちかはる春の色ゝ
四 いこもめで度新年に、
三 降服せしめし事なれば、
萬歲萬歲萬々歲、
渤海灣もさながらに、
七 難攻不落と謠はれし
上 朝日輝く旗風に
下 またたく隈やなかるらむ

三 是ぞ世界に著じるき
五 名譽の戰と知られけり〳〵三

主、春姫
賓、大友親世
同　妻
處、筑前博多

○濡衣碑は筑前國那河郡堅粕村に在り竪六尺、幅四尺三寸正面に梵字あり康永三年八月日攝待衆合二十七とあり康永三年は北朝の年號にして南朝の興國五年に當る

○大友親世は氏時の子、能直の曾孫なり、頼朝中原親能を鎮西守護と爲し緒方族の沒邑を予ふ、親能の養子能直鎮西奉行となり大友氏を稱し小貳と鎮西の政を掌り太宰府を治所とす

（國史眼）

濡衣

乙抑左近衛將監大友の親世は
三筑前の守護となりてより
四夫人は一人の息女春姫を遺し
一敢なく死去させければ、
四妻をば迎へ給ひけり
五後の母にも愛でられしが
二女の三兒を擧けけり
中射る矢の加く過ぎけるが
月上生しゝ我子に代を讓り

父祖の名譽の後を襲ぎ、
冷泉の津にたはしゝが
五唯かりそめの疾病に
三程經て親世は繼配の
七此時春姫甫めて十二歳
三繼母はいつしか懷姙りて
夏上斯くて三年もたつか弓
下追ひ〳〵つのる母の慾
中豐けき榮華見んものこ

下あらぬ謀計を企てたり
一夜密にしめし合ひ
六擊つ眞似してぞ犇けば
三子細如何と問ひ給へば
四さる人の委囑に由り
四左らば誰人に頼まれしぞ
一曲者遂に答ふるには
春姫君はかねてより
一妙見に祈誓を籠め給ひしも
一殺してよとの御依頼
四去程に奥方一味の家來共
四一人の曲者を引捕へ
二親世夫婦も出て來り
曲者臆めたる氣色なく
奥方を殺さん爲に忍び入候
疾く言へ聞かんと問ひ迫られ
三申すも恐多けれども、
奥方を調伏せん迚夜な〳〵に、
四靈驗今にあらざれば
證據こいふは今宵の雨に

姫は途中に逢ひ給へば御検め召さるべしと申げり〻
○偖てもなさぬ中とは言ひ乍ら失なはむとはしつるぞや〻
亡き人の子と思へばこそよゝと許りにむせび入る
○親世は不審の眉を打顰め
雨に濕りしのみならず
偖てはと愕き父親世は
○實に痛はしや春姫は

必らず衣や濡れつらん
奥方聞きて泣き伏しつゝ
何咎ありてみづからを
子は子でありて子にあらぬ
萬事に眼ばし懸けつるをと
道理めきて聞にけり〻
先づ姫の衣を検めしに
砂に塗れし汚染もあり〻
深き愁ひに沈みけり〻
斯る隠謀のあらんとは

夢にもそよとしら川の
唯スヤ〳〵と臥し居たり〻
姫の寝所に走せ入れば
父上如何召されしぞと
爾は今宵何處へか出つらん
姫は寝耳にみづからは
清しき答も聞きあへず
母を咀ひに出で行きし
尚ほ其上に人手を頼み
斯く淺間しき非道の子

流れを下る夜半の舟
やがて親世は荒々敷
春姫驚き眼を覺まし〻
いへど親世は聲鋭く〻
隠まず申せと宣ひたり〻
何處へも出で候はずと
それ其衣は何として濡れたるぞ
證據と誠に知られたり〻
母を失はんとは何事ぞや〻
思へば世にも恥かしと

烈しき怒に氣もたろ〳〵へ
正しく濡るゝ濡衣へ
さこれごいへぬ義理の中へ
泣くより外なかりけりへ
何の因果かいとし子をー
鈍る柄元にぎり締めへ
姫はしばしと取縋りへ
冤罪の汚名を身に負ひてー
○されど是非なし喃父上
見上ぐる顔と見下す顔

衣服を見ればこは如何にー
○着せしはさすが彼の人ごー
姫は分疏せんすべも
○陽てに怒る父親もー
双の錆に爲す事かごー
心に泣きつ抜放てば
死ぬる生命は惜からねごー
逝くはなか〳〵口惜しゝへ
是や此世の御別れと
落る涙ともろともにー

十六歳を一期とし
斯くて姫の成敗に事治りしが
父の枕頭に現はれてへ
着せられて干すよしもなき濡衣は

ながき冥土のさわりなりけりへ

斯くなん言ひて潸然と
後日に至り妻の隱謀と知れ
佛の道に入りにけりへ

泣くよと想へば夢覺たりへ
親世は終に發心しー
手向の水や涙さへ

流れて盡きぬ石堂川
いともあはれの碑はー
濡衣塚と今も尙ほ
川の邊にのこりけり〳〵

主、常盤御前
今若
乙若
牛若
賓、彌平兵衛宗清
同妻
處、伏見

伏見吹雪

一頃は平治二年睦月の末
袂の水柱ときしらぬ
一木の下闇に踏み迷ひ、
乙若丸の手を取りつ
五さして行方はしら雪の
四伏見に行き暮れ給ひけりゝ
五燈火の影したひ寄りゝ
幼き者を召し具して一
三○アハレ情に一夜の宿

春めきながら冴かへり
二常盤御前は常盤木の一
右に今若左には
乳房にすがる牛若を抱きつゝ、
三宿はなくとも里の名は
七かくて行手六にほの見ゆる一
○是は大和へ下る者なるが、
雪に道をば失ふたりゝ
四恵み給へと請ひければ、

十八九なる女房の
親子の人を熟々と打守り
御宿申たうは候へども
源氏にゆかりある者を
○其御姿にて渡り候はゞ
自らは白妙と申し
源氏譜代の者なれども一
一彌平兵衛宗清が妻にて候なりゝ
一御身の爲めに惡しかりなむゝ
三疾くゝ落延び給へかしと

紙燭かゝげて椽に出で、
○痛はしの御有樣や
此頃平家の沙汰として
堅く詮議のあると聞くゝ
咎められむは必定なり、
比企藤九郎盛長が妹、
今は故ありて平家の侍一
六今にも良人歸りなば一
五情なき樣には侍れども一
十いふもゆかしき深みごり

〜常盤の松に白妙の
下〜積るめぐみと知られけり〜
五ても生死はわかねども
三菅の小笠を屏風とし
五母子四人の八ツの袖
七間なく降來る泡雪の
五常盤御前は痛はしや
三苦しみ悶へて伏しまろぶ〜
五喃悲しやな如何にせむと〜
一たのが小袖を脱ぎ取りて一

中〜雪より清きこゝろざし
七左れば途方も今はくれ羽鳥
ねぐらをこゝに定めむと、
身はならはしの軒の蔭〜
六片敷ながら五臥しけるが〜
六消にて肌に沁み渡り、
終に寒氣に襲はれて〜
六今若乙若驚き つ一
四額を押へ手をさすり一
母の上へと打重ね

共々いたはるしをらしさ〜
五小さき衣をはぎ退けて一
〜寒さ堪ゆるいぢらしさよ、
一かゝる有樣見るよりも〜
七百萬餘騎の大將軍と一
五一重の衣を着せかぬるは
四可愛の者よ御身達が一
三母は着ずとも暖かなり、
膝に搔き寄せ抱きしめ一
○折しもあれや彌平兵衛

兄を見眞似の牛若丸〜
同じ樣にも母に着せ〜
四常盤は漸く眼を開らきし
○嗚呼情なや淺間しや、
六仰がるべき若達に〜
〜如何なる神の咎めぞや、
厚き心は綾錦一
此方へ寄れと三人を
五よゝとばかりに泣き給ふ〜
雪踏分けつ歸り來て、

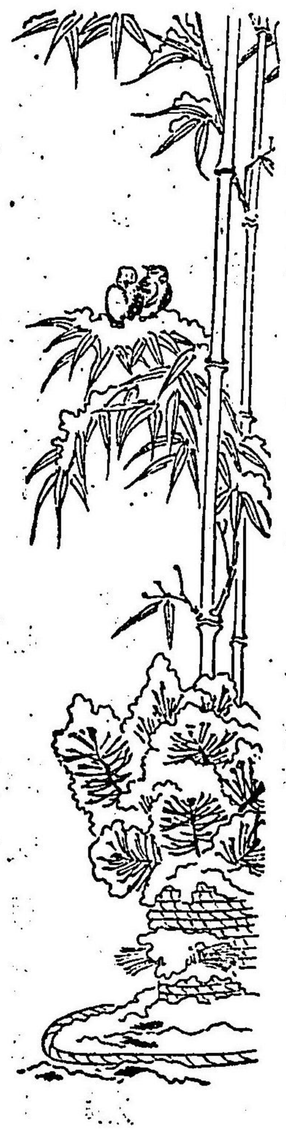
我家の軒の人影を
ー常盤母子に紛れなし、
○窮鳥懷中に入る時はー
今此母子の羽拔鳥ー
情知らぬは武士ならずー
上心をかためて宗清が
下音に白妙出で迎へー
○稍ありて宗清女房に打向ひ
ー雀のさわぐ聲ぞするー
いへどそれども白妙はー

何者なるかとよく見ればー
搦め捕らむとたもひしが
獵人すらも捕らずとかや、
捕るも平家に何かせむ、
知らぬさまにて過さんと、
中柴の戸ぼそを打叩く
徐に誘ひ入れにける
四今宵は殊に軒の端にー
なごて今まで追はざるかと、
しらぬさまにも裝ひつ

四夜な〳〵宿る軒雀
宗清弓矢押取りて
笹輪藤の氏の紋ー
追はで叶はぬ宗清がー
切て放ちし鳴鏑
五乳房索めて泣き給ふ、
雪灑笠擔風卷袂
他年鐵拐峯頭嶮
詮方なくもねぐらを出でー
上潛める龍の雲を起し

見遁がし給へと言ひければ、
○竹にゆかりの子雀は
ヤガテかゝぐる時や來む、
心の誠受けてよと、
七響に驚き六牛若丸
呱々索乳若爲情
叱咤三軍是此聲
龍門の里に潛みけり、
中雨を致さん時を得て

下〻名を中天にあげし兒も　常盤が苦節の賜ものと、
五知らぬ者こそなかるらむ〳〵　三



主、露兵
賓、日本將校
處、滿洲

降　參

見渡す限り野も山もー
肌劈く　朔風も
ー草木も眠る丑三頃、
ー眼を配る日本兵
○かゝる所に前面より
ソロリ〳〵と前哨線に
此方の哨兵身を攝へ
ー打留め呉れむと待つ處に、
ー漸く間近くなりにけりへ

いづれをそれと白銀の、
御國の爲めと耐へ忍びー
只管敵の動靜にー
頼母しかりける有樣なりへ
四ツン這ひに這ひながら
近づく怪者訝しと、
人か熊かいづれにせよー
彼方は這ひつ轉びつゝー
ヤガテ止まれと制すれば

明治三十八年二月大阪

○月の輪は熊の胸間に在り、露西亞人祈誓に當り胸間に十字を畫く

上〜月の輪あたり十文字
下〜日本言葉生ればへー
○斯くて本陣へ引渡しー次第を篤と問ひ糺せば、ワットばかりに泣き出すにぞ、可笑さ耐へ泣くな〳〵とやさしくも賺しいたはるその如く、露助漸く心落着きて、是でも年は三十五戰爭なんぞは大きらひ

中〜畫きながらに降参々々露助ここそは知られたりへ通譯をして降参のー六尺あまりの髭武者男將校はじめ人々も三ッ四ッの幼兒をー頭を撫で、遣りければ、○私は露西亞の狙擊隊國に可憐い妻子あり、されど無慈悲の士官共厭應なしに引出し、ー喰せもせずに追ひ使ひ終に疲れてまどろめば

ー踊りて居るを夢に見て、ー息も吐かずに述立たり〳〵○汝が國王の角兵衛獅子ーいはれて露助得意顔、キット日本に逆さになりてーいささがけの功名にー早く松山に行き度しと、黑麵麭一つロク〳〵にー

なさけないやら悲しいやら、わしの國王が角兵衛獅子ーアーメン〳〵有り難しとー我將校は微笑つゝ何故ありて有り難きぞと○それは私にはわかり居るあやまる前兆と知られし故、ヤッポンスキーに降参し朝夕祈禱りし甲斐ありてー

ー漸く此處まで這ひ寄りたり〻
是にて生命助かりて
上 それにつきてもひもじやな
下 食ふ事なら何にてもー
性根の程こそ笑止なれ〳〵

嗚呼有難やかたじけなや
斯程嬉しき事はなし
中 拳骨一トツ賜はれと
嘗ていこはぬロスキーの、

主、辨慶
賓、義經主從
吉野法師
處、大和吉野

吉野川

明治三十八年三月大阪

甲 頃は文治元年霜月の
吉野の山の尾も峯も
中 いづれそれともしら雪を
ー主從僅か十六人
○かくて義經疲勞を息めむと
ー圍みて解る雪よりもー
ーしめりがちなる時しもあれ、
○スハヤ吉野の荒法師ー
切り散らさむは易けれ共
末ッ方の事なれば
上 谷の小川もたしなべて
踏みしだきつゝ義經等ー
下 さくら谷にぞ着かせける〻
枯木を採らせ榾柴の火をー
行末遠き身の上にー
ドット聞ゆる鬨の聲〻
執念く寄せしと覺にたり、
さばれ忠義の爲め身を捨てし

佐藤忠信の心ざし

遁がるゝまでは逃がれんこと一ツの難所に出逢ひたりゝ音も名高きしら糸の一巖上より淙々として一流の末は激浪巖石を食み、一四尋にあまる川の幅一○義經岸頭に突立て忽ち人々をさしまねき、此方は高く彼方は低くし

空にせん事も本意ならず、またも落ちさせ給ひしが抑こゝは吉野川の水源にて瀧こて五丈あまりなる、紅蓮の淵に沸り入る一兩岸絶壁削るが如く一越にん樣こそなかりけれゝキツト見渡し給ひしが○アレ見よ屈竟の切所あり特に川面に末靡く竹もあり

越さば越されぬ事やあるゝ弓を小脇に搔い挾みエイヤこばかり跳ね給ひスルリと渡り給ひけり、

下〜先きを爭ひ跳ね越にしも一判官の越に給ひつる所より一一反ばかり川上に進み行さ一○是程の山川を越しかねて一し給ふこそ見苦るしけれ、一見參に入り申さむこゝ

○いで義經が瀨踏みせむこ草摺を絡み鐙を傾け、竹の末に飛附きて

上〜さらば續けこ人々も最後に辨慶一人殘り、越にんこもせず悠然こ一對岸の人々にきこにようがしに、竹に取附きガタリピシリこ一辨慶さうなく跳ね越にて一最こ鷹揚にいひければ

判官之を聞き咎め給ひてゝ
各彼の法師に眼な呉れ給ひそと
此時人々アレヨ〳〵と立騒ぐ、
義經いそぎ歸り見給へば
たゞながれにながれ行く、
熊手を取りて投げ掛くれば、
熊手に縋りてダブ〳〵ごー
苦笑ひしてぞ御前に出でにける、
如何に利きたる口に似ざりしと仰せければ、
弘法も筆のあやまりと
○さても悪く〳〵しげなる言ひ樣かな、
二歩三歩行き過ぎ給ひしに、
あはれ法師仕損じたるかごー
辨慶は岩波にたゝかれつ
伊勢の三郎指し寄りて
人並すぐれし大の法師
漸く生命助けられー
判官此有樣を見給ひてー
あやまちは常の事ー
ヤガテ辨慶川下に走せ行きて、

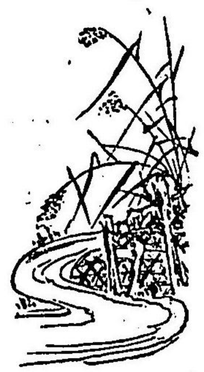
さきに人々の縋りてしー
復た舊の如く雪に挿埋めー
○折しも吉野の大衆寄せ來り
此所や彼所やと罵り合ひしが
○如何に義經なればとてー
彼方を見れば打靡く竹のありゝ
手に手を取りて組み合せー
竹にムンズと取り付けば
竹諸共に眞逆さま
あとさしら涙となりにけりゝ
竹を二三本根より斷ち伐りつ
心しづかに判官の跡したひけりゝ
かしこうぞ川を越ゑ給ひたる、
治部の法眼申けるは、
鬼神にてはよもあらじと
さればこそと兩三人ー
エイ〳〵聲して跳ね越ゑつ
根のなき竹の堪るべき
川に落込み沈み入りー
かゝる有樣見るよりも

吉野川

判官はじめ人々もー　皆同音に打笑へば

上〜何の面目あら法師　下〜跡追ふすべもしら雪の

もとの路へとスゴ〳〵と　歸り行くこそ笑止なれ〳〵



主、日本驅逐艦
漣
賓、露國驅逐艦
處、日本海

名譽の漣

明治三十八年六月清國營口

時しも頃はほとゝぎすー　啼くや皐月のあやめ草、

綾目もわかぬ烏羽玉の　闇を蹴破る漣艦、

殘餘の敵を探りつゝー　日本海を縱横にー

いと勇しく駛せ廻る、　是ぞ明治三十有八年ー

ー五月廿七日の眞夜中頃　而かも我主力艦隊のー

露西亞波羅的敵艦をー　大に擊ちつ沈めてし、

振古未曾有の海戰のー　ありし當夜と知られたりゝ

○所は名に負ふ玄海洋　さらでも高き荒浪を

上〜きのふに續く北風の　中〜立騷がしゝ名殘とて

（下）舷たゝく浪の音へ　（上）甲板洗ふ群飛沫
（中）艦の動揺すさまじく　（下）野分に散し草の葉の
天に漂ふごとくなりへ　○かゝりし程に夜も明て
四方の眺望は霽れつれど　敵と見るべき艦も無く
詮方なみに漣艦は　鬱陵島に向ひしに、
○二十八日の午後四時頃　前面遙に二・條の一
一棚延く煙認めしかば、　敵か味方かしら浪を一
一蹴立てゝヤオヲ追縋れば　紛ふ方なき敵の艦へ
一艘ならず二艘とも一　揃も揃ひし驅逐艦
對手に取て不足はあらじ、　（上）いざや鍛へし技倆を

（中）試めし呉れんと漣の一
彈着距離の近づくを一
○頓て聞くや砲門の一
はや其内の一隻は一
後に殘れる一艘は一
一其儘そこに止まれりへ
たくれを取て早腰を一
倩々敵を眺むれば一
一揭げてこそは居たりけりへ
如何なる事や爲すらむと
將卒共に雀躍しへ
今や遲しと待掛たりへ
火花に敵は堪り得ず一
逃足速く遁れしもへ
動きもやらず擊ちもせず一
○偖も不思議の擧動哉
拔かしゝものか訝しと
思ひも寄らず白旗を一
譎詐多きロスキーは
漣少しも油斷せずへ

先づ信號にて降服のー
彼は機關に故障ありー
特に本艦には二名の提督座乘すと
驅逐艦に將官のー
實にも異例の珍事なりー
我將卒は敵艦にー
人員檢査を爲したりしにー

上〜ロジエストウエンスキーを始とし
正しく艦内に在りければー
思はぬ獲物に胸轟き
眞意を確と糺しに、
炭水ともに缺乏せり
答はよもや虚僞ならずも、
二人迄もあらむとはー
イデさらば臨檢せんとー
サツとばかりに乘入りてー
波羅的艦隊司令長官たる

中〜幕僚以下十餘名
流石物に動ぜぬ我將校もー
少時あきれて立ちたりしはー
道理なりける次第なりー
我艦に移乘せしめんとしつれ共、
重傷を負ひて動き得ず
武士のなさけに差許し、
我漣に連れ歸り、
曳きて佐世保に引揚しはー

上〜名譽は著るき漣や
下〜幾末かけて千代よばふー
勝利を世々に傳へなむ〜
斯て先づ敵の長官をばー
渠はきのふの激戰にー
いと苦しげに見にければー
自他の將校四名を捕へー
大綱にて敵艦をー
古今稀有なる偉功にて、

中〜志賀の松風永久にー
いとも芽出度海戰の、

主、和藤内
賓、鳴、蛤
處、肥前平戸

○鄭成功（本邦人俗に和藤内と稱す）は明國の皈化人鄭芝龍の長子なり、慶長十七年芝龍祖國を脱して日本平戸に來り後數年を經て田川氏を娶る、明の熹宗皇帝天啓四年即ち本朝の寛永元年甲子七月長子成功平戸に生る、成功の弟七左衛門田川氏を冒して長崎に居る。成功初名森、字は大木、小字は福松、七歳の時平戸を辭し明に渡る、是より先芝龍南歸して明に降り戰功を以て都督に任せらる、成功三十二歳の時隆武帝に謁す、帝國姓を賜ひ、御營中軍都督に拜す、儀駙

松浦潟

三 茲に大日本肥前の國ー
釣垂れ綱引き世を渡る
四 舊大明國の忠臣ー
三 暗き帝を諫めかねー
四 此日の本につくし潟ー
ー男子を一人擧けしかば
六 偖も二十餘年の春も立ちー
四 小六月さて暖かやー
三 身の活計と和藤内

松浦の郡平戸の郷に、
老一官と申けるは、
鄭芝龍の假名にて、
自ら長沙の罪を避けー
四 浦の乙女と契を籠めー
和藤内とぞ名けける、
五 秋も過行く十月のー
三 備中鍬に目籠提げー
濱邊へこそは出でにけり、

七 やがて干潟を鋤返しー
五 拾ひし貝は何に〳〵ー
夏上 汐吹上のすだれ貝
下 一筆書て送りたひらぎや、
中 心寄せ貝いたら貝ー
下 われは蝮の片たもひ、
三 折れて恥らふ子安貝
中 寢もせで一人あかにしの
三 人のみる貝わすれ貝、
秋上 身にしみ〴〵と蜆貝

六 蛤踏んでいろ〳〵のー
甲 寄生蟲小螺子蛤仔貝ー
中 ちらと見初めし姫貝に
春上 ほや〳〵わらぶ赤貝に
君は酢貝で在す共
七 額に六つの角貝五帆立貝
山上 娘の花貝さくら貝ー
下 誰を待てこや蟶貝や、
嬉しき夢の床ぶしはー
中 門出よしの螺貝は

馬に同じ、此年成功母田川氏を長崎より迎ふ、二十三歳の時忠孝伯に封せらる、此年母田川氏自殺す、成功二十六歳にして延平公に封せらる、三十五歳の時延平群王に晋む、三十八歳の時和蘭人を逐ひ、臺灣を取る、隆武十六年即ち本朝の寛文二年壬寅四月延平招討大將軍鄭成功卒す年三十九

下〻悦びの貝ごそ採りにける〻
日蔭に口を打開らき、
卜汐を吹て盛り上げしは、
樓臺を作すといひしもー
少時イみ居る所に〻
求食る羽音たもしろくー
嘴怒らし狙ひ寄りー
蛤得たりと貝を合せー
嶋は俄に興醒め顔
頭をふりて岩根に寄せー
中に一ツの大蛤ー
取る人あり共しら泡のー
實にや蛤よく氣を吐てー
斯くやと見これ和藤内ー
磯の藻屑に飛渡り
たりゐる嶋のキッと見付、
一突き丁と啄つけば〻
しッかと喰締め動かせず〻
引きッしやくりッ鼓翼し
打碎かんず鳥の智惠〻

蛤は汐の溜へ引込んとー
翼を張りてパッと立つ〻
つられて落ちて又上るー
毛を逆立ちてぞ爭ひける〻
持ちたる鍬をカラリと捨て〻
われ父が教によりてー
本朝古來名將のー
軍法に心委ねしに、
軍法の奥義悟りたり〻
嶋の觜の尖りたるも德なし、
シリ〳〵後に引き下れば、
一丈ばかりあがれどもー
嶋の羽根搔き百羽搔きー
和藤内熟々眺め居たりしが
嗚呼面白し面白し、
唐土の兵書を學び、
合戰勝負の理を考へー
令嶋蛤の諍ひに
蛤貝の堅きも詮なくー
遂に我手も濡さずしてー

一二ッを一度に捕り得べし〳〵
一其虚を討たん秘密なり〳〵
六大明韃靼鳴蛤の國爭ひ一
四あはれ唐土に打渡り
三攻め戰ふ程ならば、
中〳〵唯一呑にせん物をと
一一念の末ぞ逞しき〳〵
三異國本朝に名を揚げし一
五むかし語を傳へなむ〳〵
三是ぞ兩勇闘はしめ一
五誠や父一官の生國は
四今や合戰最中と聞く〳〵
四此理を以て彼理を推し一
夏上〳〵大明韃靼兩國を
下〳〵思ひ染めたるますらをの
五終に其素志を貫き
四延平王國性爺の、

主、淺野長矩
賓、吉良義央
處、江戸城内松の廊下

松の廊下

明治三十八年十二月大阪

二さても元祿十四年
一當時の將軍綱吉公一
三大名小名悉く、
六中にも淺野内匠頭長矩は
四他に先んじ種〳〵に一
四爰に吉良上野介義央は、
四等しく未明に出仕爲し、
人もなげなる擧動に、
七やがて勅使の登營に
三月十四日の東雲に、
二勅答あらむ賀日とて一
柳營さして登城あり〳〵
三勅使饗應の役なれば一
四心を碎き居たりけり〳〵
四式作法の師範とて一
三差圖に親疎の偏頗あり
驕る狀こそ奇怪なれ〳〵
六間もあるまじき空の色

巻上
夜はほの〳〵と明け初めて
下
袖を連ねて居流れしは〳〵
中
見ゆるばかりの晴の場
四
此時内匠頭は玄關にて
三
勅使たん迎ひの其砌
但し御箱段にて可然や、
いとしとやかに問はれしに、
一
今に於て四是程の事ー
七
貴公の如き不束者、
ー皆寛大の御治世よと、
中
威儀を正し、諸大名
夏上
耀き渡る星かとも
下
いとも光榮ある景色なり〳〵
上野介に出會ひければ〳〵
石垣の下まで進むべきか、
御教示仰ぎ候と
一
吉良は傲然聲荒く〳〵
質くは粗忽の至なり〳〵
よくも役儀の勤まるもー
六
衆人中に嘲笑りつー

六
尻目に掛けて入りにけり〳〵
三
餘りの過言に手に汗握りー
五
淺野内匠頭長矩は
一時に嚇と憤怒を發し、
ー〳〵狂ふが如く追ひ縋る〳〵
五
此程よりの汝が無禮ー
〳〵覺悟をせよと喚きつゝ、
ー眉間に發石と切付けたり〳〵
ー衿首丁と薙ぎ拂へばー
三
〳〵今一太刀と振翳すー
三
左右に扣へし旗本衆、
伏目に成りて居たりしが、
六
今の雜言日頃の無念
七
兩眼血走り獅子奮迅ー
六
上野介しばらく待てウ
最早堪忍成り難し〳〵
二
小さ刀を拔き放ちー
六
切られて遁る上野のー
吉良は前にぞ打倒さる〳〵
内匠頭の背面より、

四梶川與三兵衛走り寄りし

七内匠頭は聲振上げ、

五放ち給へと悶躁けども、

七無念〳〵と五悲みつゝ

五心の中やいかならむ〳〵

三嗚呼内匠頭一朝の怒に因り

一大事を終にあやまれり〳〵

五實にや名に負ふ大石の

中亡君の怨敵を鳥が啼く

三泉が岳の苔の下、

兩手を抱へ組み留めたり〳〵

○五武士のなさけに候ゑ

四梶川遂に放たざれば、

二怨恨を三呑みて囚れし

三思ひ遣るだにあはれなり〳〵

身をも家をも打忘れ一

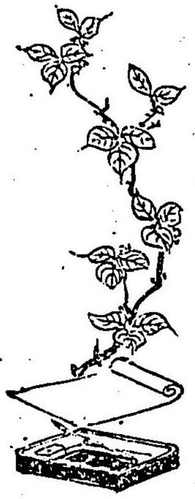
七されど重き任務を身に帶し

ア上盡す忠義に時を得て

下吾妻に名高き高輪や

五美名を千古に留めけり

三美名を千古に傳へけり



主、赤穂の義士
賓、吉良上野介家臣
處、江戸本所

義士の本懐

こゝに播州赤穂の涙人
ー義に勇みたる同志の面々、
ー吉良上野介義央をー
艱苦に身をば俏しつゝー
天の佑か優曇華のー
○時しも元禄十五年ー
浮世の人の子の刻をー
○精、神も服裝も打揃ふー
文字の符號に討入のー

大石内藏助を始めとしー
不俱戴天の君の仇ー
伐ちて本懐遂げなんと、
憂き年月を送りしが、
花咲く秋ぞ來りけるゝ
師走中の四日の眞夜中頃、
計りて集ふ忠臣義士ゝ
いろは匂へる四十七
部署定め徐〻とー

ー吉良が第宅へ押寄たりゝ
中　月天心に影冴へて
春上　被く兜鍪や打物に
下　星かと紛ふばかりにてー
○斯て内藏助は表門に打廻りー
逸雄いかで躊躇ふべき
門の左右に打掛けてゝ
猿猴の如く走せ登りー
第二番には磯貝十郎左衛門、
ー續てドッと飛入りたりゝ

夏上　折しも雪は霽渡り
下　隈なく照らす銀世界ゝ
中　映る桂の花の色
いと勇ましく見にけりゝ
はや討入の下知すれば
豫て準備の長梯子
第一番に片岡源吾右衛門
ヒラリと内に躍り入るゝ
第三番に大高源吾ー
やがて大門の鑰奪ひ取り

サッと扉を打開らけは、
一同志廿餘人押入りつ一
裏門に向ひし大石主税の同勢もー
一同聲を打揃へ
亡君の仇を報ぜん爲めー
一出合ひ給へ〳〵と呼はりたり〳〵
山鹿流の達人なれば
○しづけき天に鳴り渡る一
一大槌にて玄關の數子戸を擊破り
此時吉良の家臣新貝彌七郎一
内藏助を先頭に一
跡をば犇と鎖したり〳〵
玄關前に來會すれば
淺野内匠頭の遺臣
唯今貴館に推參せり一
原より大石内藏助は
懸れと打つや上〳〵陣太鼓〳〵
響に應じ横川勘平大高源吾一
難なく屋内に込み入りたり〳〵
狼狽ながらも打ち出れば〳〵
堀部安兵衛渡り合ひ
續て出る左右田源八、
一不破數右衛門受け流し〳〵
○是より敵も味方も入亂れ
上〳〵いかで義士にう敵すべき
下〳〵尚ほも書院の隅に蠢く人影〳〵
一足腰拔けし茶坊主なり〳〵
主人の寢所を案内せよと一
下〳〵膝行ながらに指示せり〳〵
一夜の衾は其儘ながら
唯一刀に薙ぎ倒す〳〵
喚きかゝれる鋭鋒を一
返す刀に車切にうなしたりける〳〵
火花を散らし闘へども
中〳〵皆悉く伐れしが
不思議の者と引出せば一
爾生命の惜しからば
言はれて茶坊主一議なく
いでやとばかり押入るに一
上〳〵主はいつしか空蟬の

下
蛻の殼に氣勢も脱け
寢肌の微暖猶ほ殘れり
納戸の隅〳〵長局
目指す怨敵の影もなし
年月肺肝を打碎き
此期に臨み甲斐もなく
死すともいかで瞑目せじと
かゝる所に大石内藏助出來り
豫て勝負は明六ツ迄と定めしに
疾く〳〵敵を獲られよと
麻蓐に双手を差入るれば
遠くは去らじいざ詮義と
隈なく探し索むれ共
嘻口惜しや如何にせん
千辛萬苦を竭しゝに
本懷遂げずもあるならば
切齒なして居たりける
各方は何迚猶豫めさるゝぞ
いまだ時刻に間もあるべし
烈しき下知に鼓舞され

復た八方に立ち向ふ
幽かに物音聞ゆるにぞ
内より烏炭磁器を
太刀振翳し突き出づるを
得たりと兩人に斬り結べり
十文字の鎗打ち扱ぎ
武林唯七飛んで入り
如何なる者かと熟視れば
中
きらめく小袖吉良殿か
生擒者に訊問せば
折もこそあれ雜部屋に
板戸をふたゝ蹴破れば
投げ懸〳〵二人の武士
茅野和助大石瀬左衛門
此時間重次郎は
潛み殘れる一人に突懸れば
髻掴み擲げ出したり
上
下には白無垢上に綾
下
それかあらぬか恠しやと
紛ふ方なき少將殿と

聞きていづれも悦び勇み、
去手亡君の斬付け給ひし
○斯ては最早疑ひなしこー
一同此所に寄り集へり〳〵
只管切腹を勸むれども
短氣の唯七堪り得ず〳〵
吉良の肩先切下げたり〳〵
粗忽の擧動致されまじ
すでに詩はんこせしがー
重次郎は上野介の止めを刺し

尙も肩の邊を開き視るに
太刀創の痕歷然たり〳〵
相圖の號笛吹き鳴らせば、
左れば内藏助は吉良殿に打對ひ
返辭も得せぬ焦躁さに、
皆樣御免候へこー
重次郎は唯七を突除けつ、
一番鎗は拙者にて候そこ、
内藏助の指圖に依り、
唯七は首をこそは上げたりけり、

上〳〵折しも明るじのゝめに、
下〳〵聲も忠義をこゝほぎてー
踏みしだきつゝ悠然こ

中〳〵ねぐらはなるゝ小雀の
明け六ッ時や六ッの花、
無緣寺指してぞ引揚ける、

主、酒顚童子
入道
賓、母御前
處、都

座禪

座禪

酒は百藥の長とはいへど
いさゝむら竹ほど〳〵を
拂らふ方便となりぬべし、
さる貴人のわすれがたみ、
不足といふは知らぬ身も
一日童子は母にまみゑ
唐土の淵明は酒に醉臥し
兒は淵明に及ばず共
酒に好かぬ法を

すごさばなか〳〵害多し、
まもらば憂の玉はゝき、
茲に綽名を酒顚童子と呼ばれ
今は母一人兒一人にて
好く酒を禁められしぞ恨なる
故ら愁然として申けるは、
達磨の骨髓を得たりしこかや、
一七日の座禪を行ひ
悟り得んこは思ふなり、

しばし一室に閉籠れば
待てば甘露の日和あり
上一人咲壺に入りつゝも
下ドッカと座しつ時計る
時分はよしと手を鳴らし
家來を近う召し寄せて
此程絶えて酒をまゐらねば
左れば座禪に言寄せて
近頃汝には大役なれど
我身に代り座禪してよ、

た暇申すと退きけり
絞れば出る智惠もあり
中離れ座敷の中央に
針の進むを待ち居たり
六尺餘りの入道といふ
偖ても汝の知る如く
腹の虫の泣悲しむこそ不憫なれ、
まさぐと母を誑りたり、
此に幸ひ棚の達磨の衣裝あり
其間に吾は窃に脫出でゝ

○又六は酒店なり

―又六指して一と走りー
餘儀なき賴みに入道は
中〜達磨の衣をスッポリと
―鬼に法衣の如くなりへ
さらば行くぞと宣へば
隨分速く歸らせ給へ
上〜承知々々といひすてゝ
○斯る所に母御前はー
―子故に迷ふ親心へ
―一と間を覗き見給へばー

虫の泣き音を止めんと、
上〜不承ながらも座を占めつ
下〜被ぎし狀はさながらにー
○童子は悅喜斜ならず。
入道大に不興聲、
遲くば役目辭し申さんと、
下〜童子は背門より出去れりへ
我子の座禪痛はしとー
銚子盃取りそろへー
行ひ澄まし居たりけりへ

母は此狀見るよりもー
是れ其樣にして居給はゞー
今宵は母が許すよー
○はやタブ〳〵と注ぐ音や
中〜心氣懊惱の折なればー
―法衣の裾より手を出しへ
―復差出してウと受けー
―銚子輕げになりし時へ
何さま身體が太過ぎるとー
―肩を窄める其途端ー

はや涙ぐみ近寄りつ、
病氣にもや罹らなむ、
笹一つ呑みてたもと、
上〜にならぬ香氣も時による
下〜何かは以て堪るべきー
押俯伏てスッと乾しー
二杯三杯又四杯ー
母は不審の眉を顰め
いはれて入道打愕きー
毛臑を如鬼と露したりへ

○さて訝かしと母人はー
ー入道は頭を抱へ平伏せりへ
ー問はれて入道行き詰りー
母御前キッと思案の上ー
ー我子の歸るを待ち給へり、
ー足もしどろに入り來り、
ーまづ衣を脱れと宣へごー
是は御忍濕と覺ゐ候ー
こゝに一瓶を持參せりへ
ー鉢くも謀られ給ひしこそをかしけれ、

達磨の衣を引卷ればー
こは如何な事當人はとー
狼狽ながら遁げにけりへ
入道の如く座を占めつー
斯く共知らず酒顛童子ー
○偖て〳〵入道待遠にてありつらむー
達磨は頻りに頭を振る、
汝にも酒を與へんとてー
何はしかれ賢う見ゐても母人はー
いざ其衣此方へ借せー

ー一番舞ふて見すべしとー
ー母人にてましますにる、
ー桑原々々萬歳樂
中〜酔し酒さへ一時に醒め
是もたみきの業ならん、

ムシズと衣を引退くればー
童子は仰天途方に迷ひー
上〜地震雷神火事母人よー
下〜唯わな〳〵と戰慄けり
實にも笑止の至なり〳〵

琵琶歌卷の三終

琵琶歌卷三

定價金四拾錢

著作權所有

明治三十九年十一月十日印刷
同　三十九年十一月二十日發行

著作者　工學士　逵邑容吉

東京市日本橋區通一丁目拾七番地
發行兼印刷者　青木恒三郎

大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷
印刷所　嵩山堂印刷部
電話西七八貳番

大阪市東區心齋橋筋博勞町角
發行所　青木嵩山堂
電話局東貳五〇番

東京市日本橋區通一丁目角
發行所　青木嵩山堂
電話局本局七八九番

明治三十九年十一月十日印刷
同　三十九年十一月二十日發行

琵琶歌卷三

定價金四拾錢

著作權所有

著作者　工學士　遠邑容吉

發行兼印刷者　東京市日本橋區通一丁目拾七番地　青木恒三郎

印刷所　大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷　昌山堂印刷部　電話西七八貳番

發行所　大阪市東區心齋橋筋博勞町角　青木堂書店　電話東貳五〇番

發行所　東京市日本橋區通一丁目角　青木堂書店　電話日本局七八九番

玉園遠村容吉君作歌▲旭翁橘智定君曲譜

筑前琵琶歌

卷一目次

忠信　蟬丸　吉野静　好誥者　經正　大江山
景清　陰辨慶　木村長門守　雪中竹　義家　淨瑠璃御前
非合戰　敦盛　裂裟御前　静御前　吉野山　業平　名和長年　知盛　太田道灌　鍛引
海洋島　蒙古の寇涙　惠の露　桶狭間　鵜越

卷二目次

宇治川上之段　同　下之段　雷之花　新年梅　梅若
三人上戸　項羽　白虎隊　虎御前　新年海
平壌　四條畷　山崎合戰　勾當内侍　稲村ヶ崎
佛御前上之段　同　下之段　橘媛　重衡　嚴上松
旅順之砲撃　九連城　烈士沖禎介　金州南山

卷三目次

芳流閣　泉の三郎　備後の三郎　朝比奈三郎　雨乞小町
鶏鳴返し　荒乳の關　矢口の渡　管公　靈馬連
佐渡の若竹　夜の鶴　新年山　旅順の朝露　濡衣
伏見の吹雪　降參　吉野川　名譽の連　松浦潟
松の露下　義士の本懐

音曲書類

箸尾竹軒著
手風琴獨案內 第一集 一名日清歐樂譜大全
西洋綴 大形美本 正價金壹圓 郵稅四錢

箸尾竹軒著
手風琴獨案內 第二集 一名日清歐樂譜大全
西洋綴 大形美本 實價金壹圓 郵稅四錢

箸尾竹軒著
手風琴獨案內第三集 附西洋橫笛銀笛及吹風琴使用法
征清歌曲集
洋裝美本全一冊 正價十五錢 郵稅四錢

箸尾竹軒著
手風琴獨案內第四集
流行歌曲集
洋裝美本全一冊 正價十五錢 郵稅四錢

鶯聲散士著
尺八獨習之友
大形折本洋裝 正價金十五錢 郵稅四錢

尺八獨習之友 第二篇
大形折本全一冊 正價金十五錢 郵稅四錢

尺八獨習之友 第三篇
大形折本全一冊 正價金十五錢 郵稅四錢

鶯聲散士著
獨習
尺八樂譜唱歌集
美本全一冊 正價金十五錢 郵稅二錢

鶯聲散士著
篠笛獨習之友
大形折本全一冊 特別正價十五錢 郵稅四錢

箸尾竹軒著
月琴清笛胡琴
清樂獨稽古
大形折本全一冊 正價十五錢 郵稅四錢

箸尾竹軒著
清笛獨習 附月琴獨稽古
日本俗曲集
大形折本全一冊 正價十五錢 郵稅四錢

岡本半溪翁著
三味線月琴曲
獨稽古
折本美製全一冊 特別正價十二錢 郵稅二錢

山田美妙著
新撰帝國軍歌
洋裝美本小形全一冊正價金錢 郵稅二錢

大槻如電著作
東京唱歌
寸珍美本全一冊 正價二五錢 郵稅二錢

町田久著
公德唱歌
寸珍美本全一冊 正價二五錢 郵稅二錢

SUZANDO

琵琶歌　3

逵邑容吉

国立国会図書館

特23

413